

529
68



始



黒馬を見たり

ロプシーン作

黒田乙吉譯

.....



陸筆社

隨筆社版



黒馬を見たり

ロープシン著

黒田乙吉譯

一九二四



大正
13. 8. 1
内交

畫 裝

氏 夢 正 瀨 柳



529-68

序

『黒馬を見たり』はボリス・サヴィンコフ(ローブシン)作『蒼ざめたる馬』の姉妹篇として、本年初春巴星で出版されたものである。

名著『蒼ざめたる馬』で文名を著した彼は『かつて起らなかつた』に一九〇五年代革命運動の内幕を描寫して讀書界をさわがし、更に歐洲戦争にはペンを乗せて佛國戦線に従軍し、軍事通信にまた天才を認められ、トルストイの『戦争と平和』に比較されたものだ。彼はケーレンスキーの政府に一時陸相となり、後ケーレンスキー、コルニローフと共に三頭領の一人に擬せられた事もあるが、三頭領制は實現するに到らずして、ボリシエヴィキの天下となつた。彼、瘠身中春、今年四十一二歳、冷靜鐵の如き人、少年時代より革命運動に身を捧げ、死地に往來し、テロリストとして活動する事幾十度に及んでゐるが、剛膽なる彼は何人もこれを驚かす事が出来ず、奇蹟の如く今猶ほ健在、佛國にありて、更に何事かを策してゐるとの事である。サウエート政府

は此の不死身にして恐怖を知らざるテロリストを恐るゝ事甚だしく、彼の愛妻及び姉妹はモスクワに人質とされてゐるこの事だ。

『蒼ざめたる馬』が帝政時代に於ける革命運動を描いたものとすれば、『黒馬を見たり』に描かれた場面はサウエート政府に對する革命運動である。即ち作者サヴィンコフが一九二二年より、二三年に亘り、反サウエート軍の指揮者として『徒黨』の首領として、またテロリストとしてサウエート政權に反抗して闘つた事實を自叙傳的に書いたのがこれでもその五割以上事實そのままだといはれてゐる。彼はそ闘のひを語るかたわら、黨派に偏せず革命後のロシアの田舎及びロシア國民の眞の姿を赤裸々に描寫する事に努めてゐる。彼は世間普通の所謂『文學者』型の人でなく、その作品も、所謂『小説』の型ではない。が、本書は色々の意味に於いて廣く讀まるべきものである。譯者は信じてゐる。

大正十三年六月

譯者

黒馬を見たり

ロフシン作
黒田乙吉譯



「……一匹の黒馬を見たり、之に乗るもの手に權衡を持てり……」——默示録六ノ五、
 「……兄弟を憎む者は暗に居り、暗に行きて其往くところを知らず、是その目を暗に
 曇らさるればなり」——約翰第一書二ノ十一、

十一月一日。

大變眠たい。けれども私はそれを我慢して、ナザレンコを連れて来るやうに命じた。彼は黄色

のクバンカ(羊毛製の防寒帽)を被つて、鬮の上に正面向いて立つた。

「掛ける。」

「大佐殿、立つて結構であります。」

「乃公おのこう向き合つて、こゝに掛ける。」

彼は、遠慮して戸の許まがらひにもぢくしてゐたが、結局、椅子の端に畏つて腰を下した。

「汝おまがはブチロフ工場の労働者だつたな？」

「ハ、さうであります。」

「装甲列車「レーニン」に乗つてたのを、乃公おのこうが本隊に收容したんだね？」

「さうであります。」

「その時、乃公が何なにも云つたか復唱して見ろ。」

彼はちよつと考へて眼を上げた。

「本隊に勤め度いものは誰でも收容する。若しいやだいふ奴があつたら、銃殺するぞ大佐殿は云はれました。」

「いや違ふ。乃公は、本隊に参加りたいものはいつでもいいが、しかし裏切つたら死刑に處するぞ云つたんだ……さうぢやないか？」

「ハ、さうであります。」

「オイ、汝は共産黨員だな？」

彼は溜息氣を吐いた。

「白狀しちまへ。コムヤチエイカ(共産黨最小組合)には外にまだ誰が居るか？」

「知りません。」

「汝は一體どうなるか知つて居るか？」

「それは大佐殿の思召にありますこゝで……」

「よろしい。傳令！」

彼は何か云はうとして、椅子から腰を浮かした。けれどもその時は、既にエゴローフミフエチヤが這入つて来て居た。

「傳令、答刑百五十！」

彼が連れて行かれてから、私は服も脱がず寢臺の上に横になつた。こゝ、すぐにナザレンコモ、嚴寒中の長途の行軍も、氷柱こなつた雪を頭から被つた松林も、黄に蒼白い榎の林も、馬鞍の軋る音も、栗色の牝馬グループカも、一切合財、暗い霧の中に沈んで行つた。けれども、壁越しに打擲さ何か落ちた音こが聞え、調子を亂さない空氣の戦慄が感ぜられる。

「大佐殿。」

「四十二……四十三……四十四」……眼が冴えた。面喰つたこの未知の坊さんの家の、蒸し熱い部屋に寝るのが息苦しくなつて來た。「えい、ヂタバタするな……フエヂヤ、野郎の頭に腰掛ける」……いふ荒々しい聲が聞ゆる。エゴローフの奴、「仕事」をしてゐる。

十一月二日。

5
エゴローフは灰色の頸髯をもつたブスコフ生れの百姓である。彼はスタロウエル(露國舊教徒)で、煙草を喫まず、食事には必ず自身の食器を用ゐ、嚴格に戒律を守り決して之を犯さない。十五年前に嫉妬の爲に兄弟を殺した。けれどもこれは——「女の事」である。女の事はスタロウエルの戒

律の中にはない。彼が義勇兵を志願して来た時、私は彼に問ふた。

「何で汝は彼奴等を憎むのかい？」

「誰をでありますか？」

「共産黨員さ」

「悪魔の野郎共ですか？ 奴達を可愛がらにやならぬ理由はないと思ひます。私は家を焼かれ、子供を殺されました…… 犬だつて我が仔は不憫に思ひます…… 彼奴等、薪を積んで焙り殺さにや氣が済みません。」

「だつて白軍は地主の味方ぢやないか。」

「地主達もいづれやつつけます。」

「それは何時だ？」

「その間、時節がまゐります。」

彼は軍隊で騎兵曹長まで勤めあげた。この履歴は彼には非常な誇である。何時ぞやフェヂヤが、貴様は貴族の居候ぢやないかと冷笑した時の如き、彼は鬚をぶる／＼震はして怒つた。

「黙れ。悪病奴！。乃公は貴族のためなんかには働かん——ラシヤの爲だ。」

ロシアのため…… 歐洲戦争頃まで、彼は恐らく「我々はスコーバリ(フスコ)だ」云つて、同じロシア人でありながら「カルツキー」達を知らうさもしなかつたであらう。所が今はどうだ。馬上銃を執つて「悪魔」をロシアから追ひ出さうと志してゐる。

十一月三日。

我々の滞在する小さな町は、貧弱で不潔で、流砂に埋れて居る。林にも、道路にも、街衢にも、枕の上にも一面に砂が被さつてまるでアラビヤの沙漠にでも居る様である。けれども沙漠には焼きつくやうな太陽が輝いてゐるが、こゝには鉛のやうな陽が弱々しい朧ろげな光を投げ、粘着き易い秋の雪が舞ひ、朝な／＼寒さは指を凍えさせる。我々はまだ夏外套を着て居る。防寒長靴も有たない。手套もない。軍の後方には、誰か伶俐な者が盜をして居るのに。

腐つたやうな舗道に馬糞に埃に汚れた町の廣場には、白い頼冠りをした田舎女や白つぼい裘に包まつた百姓達が集つてゐる。猶太人は殆んど見えない。彼等は老人や、妻子や、牛や、家財に

共に林の中に逃げてゐる。彼等の眼から見れば、我々は解放者どころか、侵掠者であり殺人團である。私を假りに彼等の立場に置いて、私はやはり逃げるであらう。

破壊強盗及び強姦は嚴重なる命令を以て禁じた。之を犯すものには死刑である。それにも拘らず、第二騎兵中隊では昨日時計や指輪を賭けてカルタを行つて居る。騎兵大尉ジグンは猶太人の店を掠奪して居る。騎兵達の間には亞米利加弗の換算率が出来て居る。林の中からは八つ裂に裂かれた女の死體が発見された。等、さういふ事實を自分は知つて居る。死刑を斷行しようか？ 今まで既に二人を殺してゐる。けれども聯隊の半数を銃殺する事は不可能でないか。

私は今書いて居る。食堂では蓄音器が盛に啞聲を出してゐる。ギョー云つたり、啞せたり、恰も器械の不如意を訴つが如く鳴つてゐる。フェヂャは蓄音器を修繕しながら、ながい事手をつくしてゐたが、さうくしびれをきらして、やけに唾液を吐いた。それから低い聲で唄ひ出した。

火のつくやうに可愛がつた、

ロシアの國の勞働者

トロツキーにイリチを、

そして其他の奴共を……。

十一月四日。

フェヂャは畫家である。「勤務」の餘暇にはよく「繪」を描いてゐる。さうした繪の一枚を今日の私の許へ持つて來た。それは彼の自畫像であつた。火のやうな人參色のその頭髮。歴潰されたやうなその平んだ鼻。落付かないその眼——一眼は彈丸に見舞はれて潰れ、他の一眼は、愉快にせかせかと瞬たいてゐる。彼は英國式の外套を着て、五出の星の徽章(赤軍の徽章)を付けてゐる。肖像には「コムミツサル フヨドル フヨードロフ、タワーリツシ モシエンキン」に署名してゐる。

彼は自分の制作に恍惚として、喰ひつくやうに見入つてゐる。凝視するなといつても、それは彼には出來ない相談だ。若しも彼が歴史を知つて居たら、彼は恐らく自分をナポレオンのネイか又はダウ元帥に擬へたであらう。その實、彼はもミウラジミル縣の食料品商であつた。彼は十分に自己の藝術を翫賞して後云つた。

「グラモ・グラモ・グラモフォン……パテ・パテ・パテフォン……大佐殿、どんなもので御座いますか？」

十一月五日。

私はグループカに鞍を置くやうに命じて野に騎り出た。ながい間繋がれてばかり居た馬は、愉快に、廣幅の急歩で、雨の行潦を、ツツ、ツツといふ音高く駆けた。悪い天氣で變な暖かさだ。風は唸りながら吹いてゐた。黒つぼい薄紫色をした千切雲が、低く地上に垂れてゐた。

私は廣い野の延々とした眺望を愛する。遠方の杜の暗藍色を愛し、雪解けを愛し、又沼地の霧を愛する。かうして野に立つて居れば、私は自分がロシア人である事、農夫や放浪者の子孫である事、汗を浴びたるこの黒土の子である事を心の底から感ずる。こゝには鄙吝な理智も、貧弱な血も、そして道の端まで歩きつくし、測量し盡された歐羅巴はなく、又それを必要としない。こゝには——「白くない雪」も、無鐵砲も、亂暴も、叛亂もある。

私はベレジナ河の岸で馬から下り、徒歩で河に沿ふて進んだ。河は靜かに、深々流れて居た。

この荒地の氷は破れ易い薄氷でギラ／＼と光つてゐた。錆びたる灌木は涙を零し、足は濡れた葉の上に立つた。グループカは温順しく私の後から蹠いて来て、面を私の肩にのせたりした。その吐息がよく聞えた。かくて私には、馬も、低く地上に垂れ下つた空も、ベレジナ河も、カサカサ音をたてる灌木も、私自身も——引き離すことの出来ない、或る全き、そして認識されたい一の世界に思はれた……。私はオリガを想ひ出した。こゝに想出された彼女の姿は、いつであつたか私が莫斯科で會つた時の——白い服装に麥帽を被つてゐた彼女であつた。オリガは今何處に居るだらう？ どうして居るだらう？

十一月六日。

ロシア——オリガ、オリガ——ロシア。若しオリガが居なかつたらロシアに對する私の愛着はその深さを失ひロシアが無かつたらオリガに對する私の戀はその普遍的意義を失ふ。オリガなくてロシアに住むこゝは、オリガと共に追放されて浪々する——「破れた翼」でわな／＼きながら「塵芥にしがみついて」匍ひすりまわるのと同じこゝである。

十一月七日。

昨日、庭でナザレンコを絞首した。彼はもう／＼白状しなかつた。彼は獸のやうに臺所に寝そべつてゐた。彼は自分の前に死の迫つてゐる事を信じてゐたらうか？

朝の八時であつた。冷たい太陽が出た。夜の間、毳毛びげの様な雪が降つて、路上の砂を覆ふて居た。ナザレンコはエゴロフと一緒に玄關の階段に出た。それから身をすくめて臉を合せ、白樺の下に立つた。すつかり裸になつてゐる白樺の枝の上には、フェヂヤが馬乗りに乗つてゐた。街路には、騎兵達が一語も發せず集つてゐた

「取りかゝれ。」

ナザレンコは深い溜息を吐いた。彼は帽子も被らず、短かく白いルバーシカを着てゐたが胸も陽に頸の釦が外れてゐた。エゴロフは彼の横腹を衝いた。

「額……額に十字を切れ。この間抜け！」

私は彼が速しく指を動かしたのミ、その眞蒼になつた唇の動いたのを見た。そして私は聞いた

のよりも早く彼の言ふことを直覺した。

「大佐……大佐殿……！」

けれどもエゴロフは意地悪く吐鳴りつけた。

「死に様も知りくさらぬなあ此奴は。十字は何所向いて切つた？ 日の出を向いて切れ。」

フェヂヤが綱を投げかけた。瘠せた膝がだらりと垂れ、頭ががくりミ下へ倒れ、力のぬけた長い身體がぶら下つた。フェヂヤは木から飛び下りて、ナザレンコの足をとつてウンミ一つ引つばつた後、騎兵達に向つて叫んだ。

「すつかり見たぢやないか、さあ彼方へ行つた！」

十一月八日。

ウレデ中尉は驃騎兵である。歐洲大戦に参加し、馬上、鐵條網を踏み越えて負傷し、ゲオルギー勳章を貰つた。共産黨が一度彼を監獄に抛り込んだ事があるが、彼は無事に逃げ出した。今、彼は第二中隊を指揮してゐる。

彼は毎晩私の許へ来る。そして長椅子に腰を下して煙草を吹かすのが常である。またほんの少年で、薄色の髪と薔薇色の頬をもち、鼻下には産毛のやうな口髭をちよびり生してゐる。

「ユーリー ニコラエウイツチ、我隊はどうしてこんな穴見たいな所に滞在してゐなくちやならんでせう？」

「命令だよ君。」

「まだ中々前進しないでせうか？」

「命令さへあればね、何時でも前進しますよ。」

彼は薄い眉根を寄せた。

「退屈で仕様がありません。」

「だつたら、出かけ給へな單獨で。」

「貴官は始終擲擲つてゐられます。」

「擲擲ふ？ 途方もない。ウレデ……僕だつたら退屈な時はさつささ出かけるよ。」

「何處へ行くのです？」

「林の中さ。」

日が暮れて、星が二つ三つ輝きはじめた。窓外は嚴寒。ウレデは部屋の隅から隅へ歩いてゐる。「私には三人の姉妹と一人の兄がいました。父は將官で、母はずつと以前に亡くなりました。私どもには領地もあり、リガ附近に相當な邸宅もありました。所が父は彼奴等に銃殺され、その後兄も高加索で殺されました。勿論領地なんか滅茶苦茶です。氣にかかるのは姉妹達ですが、今どうなつてゐるか、さつぱり消息がありません……さにかく、父や兄に對してでも彼奴等に恕しちや置けません……」

「ナザレンコにだつて多分兄弟があるだらう。」

「ナザレンコ？ だつて彼奴、共産黨ぢやありませんか？」

「所で君は白派だ？」

「さうです。白派です。ロシヤの味方です。」

私は微笑した。

「そして邸宅の味方かな？」

「邸宅？ あゝ何て馬鹿々々しい……邸宅なんか問題ぢやありません。百姓共がいくら裕福になつたからつて、私はそれを何とも思やしません。」

フェヂヤがランプを持つて来た。窓の星が消えた。マホルカ(下等な刻煙草)も石油の臭がブーンと鼻をつく。フェヂヤはランプの心を捻り石油でベター〜になつた指先を卓布でおし拭ひながら云つた。「中尉殿、彼奴等、金持になりくさつて、うまくやつて居りますよ……どうもはや、全く油断のならぬ泥棒共で御座います……」

十一月九日。

エゴロフは、家を焼かれ、子供を殺された。ウレデは父を殺された。フェヂヤは母を殺された。彼等が何が故に憎悪するかはそれで明である。然らば自分自身は何のために憎むだらうか？ 自分には家もなく、家族もなく、財産もなく、従つて何等の損失もない。だから多くの事に對して平氣であり得られるのだ。誰がヤール(莫斯科第一の料理店)に乗りつけるか、それが酔つた大公であらう。耳輪をはめた酔つばらいの水兵であらう。私の問ふ所ではない。ヤールなんかは問題ぢ

やない。又、誰が「富裕になる」か、言を換へていへば誰が盗むか——皇帝の役人であるか、又は「自覺せる共産黨員」であるか——も私にはどうでもよい。人は麵麩のみで生きるものではない。而して又誰の権力が國家を統御するか、ルビヤンカ(そこにサウエート政府の國家保安部あり)であるか、或はオフランノエ・アツヂエレ・ニエ(帝政時代の特別警察)であるかも私には同じ事である。因果應報、悪い種子を蒔いたら悪い實を刈らねばならぬのは勿論である。……帝政云ひ、サウエート政治云呼ぶも果しての何の變りがあるか？ 變つたのはたゞ言葉だけではないか。そんな下らない事のために、果して我々は劍を執つてゐるだらうか？

然しながら私は彼等を憎む。彼等は帯も締めず煙草を口にしたまゝ戦線でロシアを賣つた。而も彼等は、今、帯も締めず煙草を口にしたまゝロシアを汚辱してゐる。生活を汚辱し、言語を汚辱し、「ロシア人」をいふ名を汚辱してゐる。彼等は自己の親戚を記憶しない事を以て誇としてゐる。元來、彼等には故郷なんか有りはしないのだ。彼等は又、他人の財産——彼等のにあらず、我等が父祖の——を以て商賣をしてゐる。しかも之等の連中が今モスクワの主人になつてゐる……。

若しもお前の襦袢の虱が

お前は蚤だこお前を罵つたら

往來に出て――

殺して仕舞へ！

十一月十日。

モスクワ……我が生の初めにして且つ終なるモスクワ。モスクワなくしては、即ちその曲つた小路や、基督救世主寺院や、アルバットや、クレムリンの城門や、彼女の富や、榮譽や、謙抑や、窮乏等がなくなしては、私に故郷なく、私もない。「各寺院の上には十字架が光り輝やき、雪の上には櫓の滑臺が軌る。嚴寒の朝なく窓には氷雪の花模様を描かれ、ストラストヌイ修道院には禮拜式の鐘が鳴る。私はモスクワを愛する。彼女は私の肉親である。」

私は勝利を信するだらうか？ 後方は暗愚、收賄、竊盜――まるで生來の盲鼠のやうである。

戦線は又暗愚、蠻勇、強盜――白軍の戦ではない、恰かも敵の雙生兒である。私は我軍が、さな

がら畜群の如く後へ追ひ捲らるゝ日の來らん事を恐れる。何となれば吾々があまりにモスクワを愛してゐるからである。

十一月十一日。

有りがたい、愈々前進だ。軍參謀部からグラボナミボブリスクまで進出せよといふ命令が到着した。私は祈禱式を擧げる様に云ひつけた。雨が降つて、雪の上に薄氷の皮が出来てゐた。鋪石路には雪が黄色の砂ごつちやに解け合つてゐた。褐色の泥濘は長靴に粘着し、クバンカまでも汚してしまつた。

牧師は鳩の鳴くやうな、物憂げな聲を出した。「全世界の平和を我等が靈の救済のために神に祈禱を捧げん」濡れた外套を着たフェヂヤが助祭の代になつて「神よ我等を憐み給へ、神よ我等を憐み給へ……神よ我等を憐み給へ……、ミ後を長く引つばる騎兵達は十字を切つた。多くは膝を突いてゐた。エゴーロフだけ家に残つてゐた。彼が若し我々と一緒に祈禱したら、それである。彼等スタロウエルイに従へば、我等は「反基督教徒」であり「異端者」だからである。

十一月十二日。

ウレヂが這入つて來た。焦々してゐる。彼の聲は顫へてゐる。

「ユーリー ニコラエウイツチ、これは何といふ事です？ 私はもう堪えられません。我々は實際掠奪團でせうか？ 何事があつたか貴官は御存じでありますか？」

「一體何事だ？」

「ジグンが猶太人を銃殺しました。」

「どういふ理由で？」

「金の爲めに。」

「ジグン大尉は勇敢な、實行力に富んだ將校である。けれども彼は強盜である。彼は從來「買った」ミばかり云つて「掠奪した」とか「盗んだ」ミか云つた事はない。騎兵達も、毛外套を買つた、指輪を買つた、長靴を買つたミジグン大尉の口眞似をしてゐる。自分はまだ血を見なかつた間は、不本意ながら眼を瞑つて來た。けれども今日はもう黙つて居られない。私は玄關に出た。

「馬を牽け！」

フェヂヤがゴルフフカを牽いて來た。緩歩で第一中隊に向つた。ジグン大尉は同隊の前面に、鼠地に連錢葦毛の背の高い牡馬に跨つてゐる。私はこの馬に見覺がある。それは彼が戦争で、赤軍將校のを分捕したものである。

「ジグン大尉」

「ハ」

彼は亞麻色の髭を生やし、人の善さゝうな赭顔で、年は四十歳、帝政時代は騎兵曹長だつた。

「ジグン大尉は猶太人を殺しましたか？」

「ハ、殺しました。」

「理由は何です？」

「彼奴は……大佐殿、猶であります……」

「僕は理由を訊いて居る。理由を。」

彼の顔色は紫色となつた。そして黙りこんだ。私は喇叭手に問ふた。

「喇叭手、ジグン大尉はどういふ理由で猶太人を殺したか？」

喇叭手は上官を恐れて躊躇した。私は強要する。

「乃公の命令だ。答へろ！」

「大佐殿、その理由は……時計であります。」

「ジゲン大尉、聞きましたか？」

彼は沈黙のまま、軍隊式の「咬み付く」やうな目で私を睨んだ。私は言ふ。
「銃殺。」

私は馬首を回へした。自分では見なかつたけれども、エゴロフとフェヂヤがすぐに彼を鞍から曳下し、この僧宅の壁の許へ連れて行くのを知つた。私は待つた。暫く待つた。二發の銃聲が聞えた。私は號令をかける。

「三列に、右向け右！、並足……前へ進め！」

十一月十三日。

私はオリガと思ひがけなく知り合になつたことを記憶してゐる。私はベトロフスキー公園モス

クワを歩いてゐた。その日は氣まぐれな天氣で、必要もない記憶が私を苦しめた。「傷ましい想出」がこびりついて、離れようとしなかつた。私は一人の少女に遭遇した。彼女は私に道をたづねた。私達はながいこゝ肩を並べて歩いた。私は黙つて居た。だまつてゐたのは、心が淋しかつたからだ。堪えがたかつたからだ。けれども、後で……後で私は、その方に身を曲げて、その手を握つた。驚くかと思つた彼女は、すつかり信じきつた眼で真正面からはつきりと私の眼を見たので、かへつて私がまごついた。我々の戀はかうして生れた。

十一月十四日。

林の空地を通ずる路。周囲は鬱蒼たる松杉の密林。杉の木は軋らず、枝は微動もせず、小枝は落ちても音も立てない。馬は靜かに鼻息を洩らし、調子を亂さぬ數百の蹄の音は林に響く。フェヂヤは時々煙草を喫すために燐寸を擦つた。私はごく稀に中聲で「足許左へ……足許右へ」と號令をかけた。小隊長達は、順次にそれを繰り返すのだ。斯くて我々第一騎兵聯隊は朝から行軍した。ペレジーナに向ふのである。

暗緑色の杉の木下路が盡くると、そこにすつかり錆びた沼澤地が展開された。刺をもつた草の間々には、まだ苔桃が紅玉のやうな果をつけてゐた。澤の附近には一人の牧者が家畜の群を牧してゐた。牛がモーと鳴いた。牧者は穴だらけになつた藁を着込んで、鈍い眼で我々を見送して居る。

「お前は何處から来た？」

「ブフチャから。」

「ブフチャには赤軍が居るか？」

「たいがい、居るぢやらう……」

「澤山居るか？」

「おほかた澤山だらう……」

彼は帽子をとつて、さも懶さうに頸筋をボリ／＼搔いた。白軍だらうと、赤軍だらうと、皇帝だらうと、我々だらうと、或は又共産黨だらうと彼にとつては皆同じ事だ。すべて他人であり、招かない客である。彼は株の中に生れ、林の中で死んで行く。フエヂヤは巫山戯けて、鞭を

ふりあげた。

「それ森の精！ 彼方へ行つた……」

十一月十五日。

ブフチャには赤軍は居なかつた。私は村の者を集めるやうに命じた。五十人許りの男と多数の女、子供が寺院の側に集まつた。私は我々が何者であるか、そして何のために戦つてゐるかを大に説いた。彼等はさも胡散臭さうに、私の言ふことを注意深く聞いてゐたが、私は彼等が私を信じてない事を感じざるを得なかつた。しかしそれも無理のない事なのだ。彼等の眼から見れば、私はやはり旦那である。私が土地問題に話を進めた時、幾人かの聲が私を遮つた。

「そしたら、何でお前さん達の許に將官達が居ますかい？」

「何で旦那の奴共が一緒になつてますかい？」

「何で又、馬車賃も拂はんですかい？」

私は何と返答し得たか？ 實際、我軍の後方には帝政時代の將官連が頭張つてゐる。地主達

は、又まるで水蛭ひづの如く我々に吸ひ付いてゐる。又軍隊には盗が公然行はれてゐるではないか。斯くも見たエゴローフは私を窮地から救ひ出してくれた。圖體の大きな、灰色の頬髯を垂れた、まるで破戒僧のやうな彼は、群衆の中に分け入つて、節くれ立つた自分の指を突き出して吐鳴つた。

「これは何だ、胡瓜か指か？」

「指だ……」

「乃公おれは誰だ、旦那か百姓か？」

「百姓……」

「だつたら文句は止せ。皆、銃を執れ。彼奴輩をやつてろ！ 呪はれた悪魔やコムミツサルや貴族を殺しちまへ！……彼奴等に勝手な真似されるのももう澤山だぞ……どうだ乃公は間違つてるか？」

「それぢやお前は十字を切つて、旦那共には反対ぢやといふ誓をするか？」

エゴローフはクバンカを脱ぎ寺の方に向つて恭々しく十字を切つた。

「一札書いて入れるか？」

「よし、書かう。」

「印も捺すか？」

「あゝいゝとも。」

群衆はざわめき出した。殊に女達のがやく云ひ出した。私はこの光影を最後まで見ずに小屋に歸つた。夕方フェヂヤがこの村から七名の義勇兵の出る事を報告に來た。彼は戸口に立つたまま、その報告につけ加へていつた。

「大佐殿、無益な事で御座います。」

「何がだ？」

「どうせこの百姓は逃げ出します。エゴローフの奴が、何故戦争するかと出鱈目云ふて居ります。」

十一月十七日。

林に居ても、野に居ても、夕も、夜半も、晝間も、絶えず私に離れない鋭い想がある。——オリガである。燈は燈に觸れて音を立てる。グループはに手綱を督促^{せが}んで、すこし後退りしてはまた軽く足踏をする。私の前にはオリガが立つてゐる。空色の眼がかどやき、亚麻色の捲髪が解けて亂れてゐる。彼女は、笑ひながら鬼ごつこをしてゐるのだ。鬼ごつこ……何こいふナイーブな言詞^{ことば}であらう……オリガは何處に居る？監獄にか？ルビヤンカの地下室にか？酔つ拂ひのコムミツサルの許にか？……あゝ私はそれを思ふに堪えられない。顔は火に焙^{あぶ}らるゝ様に火照り、眼は狂ほしく朦朧^{もうろう}となる。

十一月十八日。

ベレジーナ河は凍つて、叩いたら響きさうな空色の氷が煌^{きら}いてゐる。しかし、ふざけたお喋りの瀬にだけはまだ水が流れてゐる。グループカは後脚を折り、足場を探しながら險阻を下りた。河岸で何か嗅いでゐたが何に驚いたか、いきなり後に引き返さうとした。私は鞭をあげた。馬は鼻嵐を吹きながら疾驅した。

河を越え、草原の岸に上つて私は振り返つた。聯隊は愉快な列を作つて河を渡つてゐる。騎兵達は皆黄色のクバンカを被り、鼠色の外套の裾を拍車の邊まで垂れ、肩に小銃を擔つて、まだ訓練の足りない馬をよほど注意して遣つて居る。先頭は喇叭手バラボーシカ。彼の馬は氷の上に立つて、膝突いてしまつた。起き上らうとするが中々起き得ない。バラボーシカは、氣でも狂つたやうにハツハツハミ笑ふ。私も笑つた。何を笑つたか？かういふ無垢な早朝、透明な氷のやうな空氣、早瀬のせゝらぎの音、勇ましい馬、素直な人、によつて私は子供のやうに生の歡喜を感じるのだ。生活のこまなんか——思はない、知らない、想出もしない……。

聯隊は草原に集合した。私は之を行軍縦隊に列べた。騎兵は愉快な歌を唄ひ出した「オレガ」を唄ひ出した。

十一月十九日。

フェヂヤは私に双眼鏡を渡した。

「大佐殿あれであります。」

鳩色の烟雾の中に人影の動くのが見える。大勢の者がポプリスキイ街道を進んでゐる。赤軍だ。彼等は我々を味方でも思つてゐるだらうか？

「進撃！ 駆足！」

ゴループカは全速力を以て真先に駆けた。空気は唸りながら顔を劈いた。私は鞍に密着く様に低く身を屈めながら軍刀をひき抜いた。右からも、左からも、急散の如き蹄の音や、短かい叫びや、まるで鞭でも鳴るやうな発射の音が聞えた。エゴロフは夢の中の人の如く眼の前を馳せ過ぎた。鋭利なる軍刀が雄叫びし、何かと嘆息し、何かと落ちた……。戦が終つてはじめて私は私に歸つた。我に歸つた時、凍つた畑の上を躓きながら遠くの林の方に向つて誰か走て行くのを私は認めた。彼は銃を持たず、後頭部を両手で押へながら一散に走つてゐる。その後から一人の我が騎兵が追つかけてゐる。分隊長のジエレブツオフだ。私はゴループカに鞭をあて、それを追ふた。

林の端で私は彼等に追ひ着いた。ジエレブツオフは軍刀をひきぬいた。刀は唸りながらギリリミ光つた。赤兵は身を屈めて縦林の中に飛び込んだ。赤星章の兜を被つたこの百姓のロシア人に一

指すの
うすうす

瞥を投げた刹那、或る名状しがたき氣持が私を捕へた。私は叫んだ。

「其奴を放せ」

ジエレブツオフは、さも忌々しげに身を私の方に振り向けた。

「放せ！……野郎、お前は乃公に跟いて来い？」

赤兵は最初によく了解しなかつたが、後にはわかつた。見えて面喰つた眼をパチクリさせた。そして何度も十字を切つて、よく聞き取れぬ早口で呟いた。

「これは有りがたう……どうもこれは有りがたう……ほんとうにどうもこれは有りがたう……」

十一月二十日。

「殺すな」……これは嘗ては私の肺腑を突く言葉であつたが、今は虚偽としか思へない。「殺すな」云つても、皆、周囲で殺してゐる「赤き液汁」は馬の轡を沈むるまで流れてゐる。人は殺人で生き、血汐の闇を逍遙し、血汐の闇の中に死んでゐる。猛獸は飢餓に迫つてはじめて他を殺すが、人は——疲勞から、怠慢から、退屈から人を殺す。これが人生だ。これが初めから作られた人生

の姿であつて我々の造つたものでもなく、又我々の意志によつて破壊したのものでもない。だが、さうすると懺悔は何のためにするだらう？ 結局は一度も人を殺し得ず又自身の死の前にも戦慄する者が聖書の戒律について無駄口をたたくだけの事か？……何さいふ聖物嘲笑の喜劇だらう？

十一月二十一日。

我々は戦争しつゝ前進する。昨日は二度攻撃した。第一騎兵中隊長三十人の騎兵が負傷し、喇叭手バラボシカが戦死した。彼ミエゴロフは同郷のブスコフ人で、共産黨を不倶戴天の敵とする一人であつた。

彼は喰ふものが無かつた時や、疲労のあまり鞍上に皆が居眠りした時でさへ常に満足してゐた——「バラボシカ苦しいか？」——「どういたしまして、ブスコフ子にはこれしきの事は何でもありません」……田舎に彼は父を残して來た。父は信心深い氣丈な百姓で、彼が義勇兵になつたのも父の云ひつけであつた。

我々はバラボシカを林の中に埋葬した。騎兵達は手取早く「永遠の紀念」を唄ひ終り、白樺の十

字架を墓にたてた。最後の土塊を墓上に投げた時、フェヂャは眉を擧めて云つた。

「随分罪造つた男だつてが、さうく滑稽な往生をした。」

「何が滑稽だ、フェヂャ？」

「外國人に殺されたさでも云へば何でありますが、ロシア人の弾丸で死んだんでありますから。」

十一月二十二日。

夜半にフェヂャが私を起す。

「起きて下さい、大佐殿、どうぞ起きて下さい！」

「何事だ？」

「もうウラーといふ聲が聞えます……」

私は夜襲をあまり信じないが仕方がない。いや／＼ながら服を身に纏ふた。戸外は咫尺も辨ぜぬ暗黒である。村端で機關銃を撃つ音が頻りに聞ゆる。その外には何の音もない。私はたづねた。

「誰がウラーを云つたか？」

「大佐殿違ひました……御免下さい。」

フェヂヤは臆病ぢやない。けれども臆病以上に悪い。彼は錯覚である。彼には無いものが有る様に感ぜられるのだ。こんな調子だつたら、有るものを果して有る様に彼は感ずるだらうか……彼は恥ぢて云つた。

「でも十一時頃からすつと攻め寄せるやうでありましたら……」

「攻め寄せたつてかまふもんか……」私はグループカを見に行つた。馬は私であるこゝを知つて暗い物置小屋の内から身を寄せて来た——歪んだ眼がピカ／＼と闇に光つた。私はグループカの弾力ある胸やら、柔かな頸やらを撫でゝやつた。馬は砂糖を欲しがつて熱い唇を以て私の掌を探した。村端ではそれからまだ機關銃を撃つ音が止まぬ。私の背後にはフェヂヤが畏つて溜息を吐いてゐる。

十一月二十四日。

これで戦争と云へるだらうか。赤軍は殆んど戦はずして降伏した。昨日は敵の砲兵陣地——砲四門——を占領し、今日は歩兵二ヶ聯隊を俘虜にした。フェヂヤは——「この調子なら赤手空拳で敵の本營を占領する位朝飯前だぞ」ミ威張り出した。エゴーロフは彼を制止して云ふ——「冗談は止せ、すべては神の御心にある事だ……それより貴様が俘虜にならぬ用心でもしたがよからうぜ」……だが私の心は静だ。フェヂヤは滅多に俘虜になんかなる男ぢやない。

寒い。風が鳴り、吹雪が吠え狂ふ。ウレデは俘虜を野に列べ、號令をかけてゐる。

「氣を付け！」

軍服を着たこの八百人の百姓達の視線は一齊に私の顔に集中された。皆一樣に緊張した、そして疑深い眼で私を凝視してゐる。彼等は凍へながら手をズボンの縫目のところに置いて、死を待つてゐるのだ。フェヂヤは私に

「機關銃々殺を御命令になりますか？……」

こたづねた。

機關銃々殺……否、私は一人も殺さなかつた。歸り度いものは自由にポブルイスクに歸れ、我

軍に勤務し度いものは勤めてもよしと言ひ渡した。然し、彼等は私の言葉を眞正面から聞いていか、信じていゝかを疑つたらしい。横様に吹寄する粉雪は襟の蔭に解けて消えた。私は立ち去つたが彼等はまだ待つてゐた。何を待つて居たらう？ 機關銃々殺か？

十一月二十五日。

私は俘虜の許にエゴーロフミアフチャ村出身の「百姓達」を派遣した。彼等が何を云つたか知らないが多分、また、旦那のこゝこゝ、土地のこゝこゝ、馬車のこと、將官のこゝこゝなどを問答した事であらう。だが夕方は我軍に新らしい義勇兵聯隊が組織されてゐた——第一バルチザンスキー歩兵聯隊だ。今、私の中には野獸の如き感情が頭を擡げて居る。私は闘ひ度い。假りに勝つ事が不可能であるにしても闘ひたい。

十一月二十六日。

私はオリガを愛する。オリガは私を愛してゐるだらうか？ 私はまづこの問を自分自身に向け

やう。彼女が私を愛しないでは居り得ない事を私はモスクワで知つた。愛を拒む女があるだらうか？ 愛慕のために寝れ、又遺瀾ない思をしない女があるだらうか？ 而もこの戦慄すべき同胞戦に堪え得るハートを有つたものがあるだらうか？……然し、今、我々二人の間には絶壁をなした深い井戸がある——災難、騒亂、不幸及び敗北の井戸だ。監獄やルビヤンカを自分は恐ろしいとは思はない。監獄は焼き拂ひ、ルビヤンカは爆破して見せよう……たゞ恐ろしいのは離すことの出来ない人生だ。

十一月二十七日。

私は紙片に書いた。

「ボブルイスク守備隊長へ。余はこの市を直に引渡さん事を足下に命ずる。本命令に従はざる時は余は足下を絞首するミカシエウイツチ村にて、署名」

此の紙片を私は胃をかぶつた若い脱走兵に渡した。彼はにこ／＼笑ひつゝそれを外套の腕の折返しに納めた。

「これだけですか、タワーリシチ？」

「これだけだ。」

「では御機嫌よろしう、タワーリシチ。」

彼に従へば、私は「ゴスポーデン・ボルコウニツク」(大佐殿)ではなく、勿論「エチ・ブラゴローヂエ」(帝政時代の尉官の敬稱)でもなく「タワーリシチ」(朋友)である。ウレデは斯の如き「共産黨の改新」を承認しない。彼は彼が遠の昔から陛下の近衛輕騎兵ではなく、フェヂヤミ同様な義勇兵であるさいふ事も諒解しないのである。彼には「タワーリシチ」が非常な侮辱に響くらしい。私はそんな事はどうでもいい。たゞポブルイスクを占領すればいい。モスクワに向つて、虚偽の歩でもかまはない、一步前進すればいいのだ……私は參謀部から進撃を待てこの命令をうけてゐるが、待てば待つだけ不利だ。明日は進撃する。

十一月二十八日。

戦は終日つゞいた。砲は轟きわたり、榴弾は爆發して土砂を吹き飛ばし、榴霰弾は碧空に炸裂した。望遠鏡で見ると、近郊の丘の上で白樺の蔭に人々の駆けまわるのが見えたが、やがて彼等

は我が砲弾のためにバタン／＼と倒れた。人の様ではない、まるで玩具の兵隊だ。マツチのやうなサーベル、鉛筆のやうな銃、煙草の煙のやうな爆破だ。我が軍がその丘陵を占領した時、そこには踏み潰された枯草の上に、帽子や、佩囊や、外套やが散亂してゐた。フェヂヤは毛皮の裏のついた將校の外套を拾つた。それは血で汚れてゐた。彼は小刀で血を掻き落してこれを着た。凍えてゐる騎兵達はフェヂヤを羨んで、「傳令はいつも運が好いなあ。」けれども今日は騎兵達も好運であつた。人々は久しぶりに満腹し、馬には燕麥が與へられた。

十一月二十九日。

我々は黄昏頃ポブルイスクに這入つた。眞圓く蒼白い太陽が西に沈んだ。街上には人影一つない。釘付にされた家々は黒ずんで工場の煙突だけが針の如く空を指してゐる。最も大きな廣場には大きな綱にレーニンミトロツキーの肖像が、雨晒しになつたまゝ吊されてゐる。エゴーロフはサーベルで綱を打切つた。

我々は勝つた。けれども私は少しも陶醉したやうな喜を感じない。ロシア人がロシア人に勝つ

たのだ。壁に宣告を貼つたのが白く見える。それを裂き取つて見ると、我々の事を——「悪漢」とか「暴徒」を書いてある。私は自分自身に向つて問ふ、兄弟に兄弟か、或は南京蟲に南京蟲か？

十一月三十日。

分隊長ジェレブツオフの報告は斯うである。

「……それで大佐殿、私にクチエリヤエフとカリヤギンがミカシエウイツチ附近を斥候中俘虜になつたのであります。ポプルイスタに連れて行かれ、チエーカーに引張りこまれました。チエーカーにはコムミサルは居ませんで肥つた阿魔が居りました。其女はコムミサルの妾で、詰襟の軍服に廣ズボンといふ男装なぞしまして、手には拳銃を有つて居りました。女はクチエリヤエフをじろりこ一瞥して——「膝ついて坐れ」を申しました。クチエリヤエフは膝を突きました。次に拳銃をガチャ／＼させ、カリヤギンに——「今度はお前坐れ」カリヤギンは左右を見まわしました。戸の側にチエーカーの役人が立つて笑つて居りました。どうする事も出来ません、坐りました。

た。女はまたガチャ／＼やりました。チエーカーの男は二人を連れて行きました。すると阿魔奴、私の方に向き直つてやさしくたづねました。「タワリーシチ、お前の名は何ていふの？」——「ワシ——」——「タワリーシチワシ——、煙草でも喫んだらどう？」といつて煙草を呉れますので私はそれを貰つて喫んだのであります。するに女は私を自分の側近く呼び寄せて、私の肩に手なんかのつけました。——「タワリーシチ、ワシ——、お前は何でも私に話して聞かせるのね？ お前達の方に馬は何頭、砲は何門、銃は何挺あるかね？」私はいゝ加減なこゝを云つてやらうとしましたが、阿魔の奴、頓狂な聲で叫喚き立てました——「嘘—— 何で嘘を云ふの、阿呆！」——「知らないのであります」を私は云ひました。——「えゝ知らんだつて？ ……此の野郎を五十ほどひつばたいてお呉れ——」……私は叩かれました。——「どう？」私は黙つて居りました。阿魔奴、椅子から立ちあがつて、今度は鞭でビシ／＼私の頬をなぐりつけました。私の顔は一面に血が寄りました。——「此奴あつちへ連れておいで。もう五十程叩いて、それから殺つつけるのよ」 私は死刑執行人の許へ連れて行かれました。そして食物も飲物も呉れず「貴様は貴族に賣つたユダチやぞ」……なぞを罵られて居りました。そこへ本隊が到着しまして、おかげ様で私は救出された

のであります……あの阿魔は今までチエーカーにコムミサルと一緒に隠れて居つたさうであります。奴等の姓はテテリンであります。」

十二月一日。

エゴローフはコムミサルの行先を搜索した。彼は捕まつたがその妻は何處に隠れてるかわからない。テテリンの潜伏してゐたのは猶太人の家の羽根布團の下だつた。エゴローフはその罰として羽子布團から綿毛をひき出し、窓を壊し、家具を滅茶苦茶にして「すこし悪戯をした。」朝の間にテテリンは絞殺された。絞首の下手人は勿論フェヂヤである。彼はわざと長い時間かゝつて輪索を運び、綱に石鹼をつけ、それからゆつくり出て行つて、急がうともせず歸つて來た。そして火酒をあほつて食事をすまし、次に玄關に出て下手にギターを弾いた。

すぐに銃殺しちまつた

ロシアの國の労働者

トロツキーにイリーチを

それからその他の奴共を……

十二月二日。

離すことの出来ない人生と私は言つた……私は自分の道を行き、オリガは私の知らない自己の道を進んでゐる。我々の上には異つた空があり、下にはまた違つた土地がある。彼女はモスクワを呼吸し、私はモスクワへの憧憬を呼吸してゐる。彼女は現在に生きてゐるが、私は若し過去でなければ將來に生きる。あまりに遠く距たつてゐるため、もしかしたら彼女にはもう他人に私はなつてゐるかも知れぬ。又もしかしたらあまりに惨たらしい生活が彼女に或る暗い影を投じたかも知れぬ。……けれども私は信ずる「多量の水も愛は没し得ない。如何なる河も愛は流し得ない。何となれば愛は死の如く強いからだ。」

十二月三日。

軍參謀部からマイエル大佐が到着した。銀の肩章が輝やき、綺麗に磨きたてた顔が微笑んでゐる

る。彼は葉巻を薫らしつゝ、参謀部の新らしい情報を話す。私はたゞ聞くだけである。「閣下……大臣殿……男爵……侍従……それから「聯合……妥協……左黨……右黨……巴里……日本……米國……」彼は、「事件の衝に當つてゐる」こと及び「中央」の近くに居るこいふことを無上の満足として居る。彼はシガーを吸ふだけ吸ふこ、心配らしげに卓を距てゝ屈みかゝつた。

「あれは一體どうしたんですね？ 貴官は命令がないのに進撃されたこか云ふぢやありませんか？」

「さうです、命令なしにやりました。」

「オヤ オヤ オヤ……それでいゝんでせうか？ 實はね、軍司令官閣下が非常に不満ですよ……私はよく諒解してゐます、すべてを諒解します、そして十分その價值を認めます、けれども軍令によるこ……」

「どんな軍令です？」

「どんな軍令とは驚きましたな——彼は鼻眼鏡をかけて疑深いやうな眼を私に向けた——軍令によるこ貴官はミカシエウイツチで待つて居られねばならなかつたんです。」

「誰を待つんです？」

「軍司令官閣下を。」

私は彼の鼻眼鏡や、甘つたるい聲や、参謀部や大臣や將軍にウンザリしちまつた。けれども私はじつこそれを我慢して、まるで學校生徒のやうに温順しく云つた。

「大佐殿、失禮しました。」

十二月四日。

ウレデが憤慨した。彼はながいここ部屋の隅から隅へ歩いた。それから腰をかけ、次に煙草を吸ひつけ、そして云つた。

「ユーリー ニコラエウイツチ、彼奴等を追拂つて下さい。」

「誰を？」

「参謀部の連中をです……邪魔になる許りぢやありませんか。あの連中さへ居なければ私達はとらうにモスクワまで行つてゐる筈です。」

「君は軍に反対だね？」

彼は眞赤になつて黙つてしまつた。

「軍には反対だが大公殿下の味方だらう？」

「皇帝派？ 私が皇帝派だつて誰がさう申しました？ 私は何派でもありません。私は政治に關係しません。私は一兵卒です。私は決して「恥づべき」和睦はしません、そして決して肩章を外さうとも思ひません。けれどもその他の事は唾棄します。」

彼は怒つた。自分の言つたことに何か間違があることを感じたが、それが何であるか思ひ出せなかつた。私は微笑した。

「ウレデ、ウレデ……驃騎兵少尉はいゝものだ。拍車を威勢よく踏み鳴らし、キューバで晩飯を喰つて、パウロフスクで貴婦人達の御幾嫌をまつたりなんかしてね、それから戦争に出て匈牙利の騎兵を斬るのも亦悪くはないから……だが白軍でさへないたゞの「暴徒」として、メイエルなんていふ男に指揮されてさ、フェヂャミ一緒に熊の棲む野で戦ふ——しかもその對敵はテテリンと來たんぢや始まらないよ……革命とはこんなものだらうか？」

彼は怒つて出て行つてしまつた。純潔な、勇敢な少年だ。だが、一體何のために彼は自分の生命を投げ出してゐるだらうか？

十二月五日。

今日は珍らしい寒さだ。煙や吐息は凍り、鴉は飛翔中凍えて落ちた……私はミンコーウィツチ夫人の家に住んでゐる。下の「大廣間」は非常によく暖められて、何か葱でも燻く様な香がして居る。家具には灰色の覆がかぶさつてゐる。部屋の隅に置いた棕櫚樹は塵埃だらけになつてゐる。鏡の下の卓には大きな家族アルバムが載せてあるが、それにはこの土地の商人や、米國スタイルの青年——紐育に居る夫人の甥——の寫眞など貼つてある。

ミンコーウィツチ夫人はひどく却掠を恐れてゐる。夫人は私を將軍と呼び、フェヂャには梭魚の詰煮を馳走したりして大に歡待してくれる。ここに私が「淋しくない」様にきて、毎晩熱心にシヨパンを弾いて聞かせる。旅館のやうな、また停車場のやうなこの家で好きなワルツを聞くのはすこし變な氣持だ。オリガはよくこれを弾いた……私はオリガに會へるだらうか？ こんな孤

獨の放浪中に私の生命は或は終るのではなからうか？

十二月六日。

エゴローフは、寢食を忘れて町を駆け回り廻つた。彼は猶太人の小店舗を搜索し、屋敷内や、穴藏や屋根裏を引くりかへして歩き、墓場から寺院の内まで見てまわつた。そして、沈んだ氣むづかしい顔して歸つて來た。

「悪魔女奴、どこへ行きくさつたか、誰も知つたものが居りません……だけど十字架を持たぬ悪魔共で御座います。きつと探し出します。草を分けても探し出さにおきません。そして思ひ知らしてやります。配下共がいくらでも居くさるのに、女だてらに自分が拳銃さつて銃殺するなんてとても呆れ果てた女郎で御座います。聖書にはちゃんと「そしてその妻」……書いてありますが、この阿魔は、彼奴の噂ぢやありません、妾です……」

「それでお前は彼女を發見たらどうするつもりだね？」

「それは大佐殿、フェヂヤの奴と相談した事が御座います。どうするかはちやんと考へとります。

こんな阿魔は焼き殺したつて罪になりやしません。」

灰色の頬髯の生へのびた、やかましい、そして一本調子のエゴローフは戸口に立つてゐる。彼女を焼き殺しかねない事を私は知つてゐる。

十二月七日。

ミンコーウィッチ夫人が掠奪を恐れるのは尤もな事だ……監視兵が街上を巡邏して秩序維持に任じて居るが秩序なんか、全くありはしない——澤山の醉漢が絶ゆる間はない。そして酔つたのも、しらふの者も、兵卒も將校も悉く盜を働らいてゐる。竊盜強盜が毎日全市に亘つて行はれてゐる。昨日一人の醫師が私の許へ訴へに來た。彼は共產黨時代だつて今よりも悪い事はなかつたといつた。「共產黨の時代には勿論チエーカーに引つばられました……所があなたの自由時代では、偵察本部が遠慮なく引たくつて行くぢやありませんか」……偵察本部にはエゴローフが居る。エゴローフはチエーカーの連中と何處か違つてゐるか？ 私は又コムミサルと異つた所があるか？我々の信ずる事も種々あるが、今行つてゐる事を認許する勇氣はない。「我々は同じ聖油で塗

られたもの」だ。我々互々には唾み合つてゐるが、住人達は「雇人どもの掴み合ひだ」三いつて、赤も、白も、我々も同様に呪つてゐる。然らばこの雇人共は何故に奴隷の如く我等を忍んでゐるだらうか？

十二月八日。

私は聖書を開いた。「それ道肉體こくたいと成て我濟うらの間に寄り、恩寵おんちゆうと眞理にて充り」……何處に肉體と成つた我々の言葉があるか？ 何處に我々の眞理と神の恩寵があるか？「エゴローフは何のためか戦ふかわからないと虚言を吐いた。」私は何故に彼等を絞首するかを知つてゐるが、斯うして殺して後がどうなるかを知らない。軍の後方では盛に皇帝、否、皇帝でない小さな王やら、手製漫畫のナポレオンやらを製造してゐる。そこにロシアの救済があるか？……それは將軍や貴族の救済ではないか。露國民に血の唾液を吐きかけたもの、救済ではないか。モスクワ……モスクワは侮辱されてゐる。靴の踵で蹂躪されてゐる。だが、我々はその代りに何をモスクワに贈らうとするか？他のもつと酷い侮辱とますく、悪い兵卒の踵であるか？ 或は又、新に出現したミラボー

のセンチメンタルな辭句か、その萎黄病か？ 「何故乃公はロシア人には生れたらう。」

十二月九日。

さうだ、「何故乃公はロシア人には生れたらう。」神を有する國民は許つた。彼等は追従するかと思へば騒擾を起した。懺悔をするかと思へば妊婦の腹を笞打つた。「世界」的問題を決定するかと思へば盗んだピアノの内で鶏を飼つた。「我々は卑しく、邪惡であり、且つ忘恩者である。我々は又冷血なる。」去勢者である。特に去勢者である。故郷のために少數の者が死んでゐる。自由のために一二の者が闘つてゐる。だがミラボーは演説を事としてゐる。彼等の演説をきけば——すべて教えられ、打算され、且つ豫言されてゐる。彼等を見れば——すべて清楚で行儀正しく、且つ立派な風采である。しかし彼等の非現實的な國民愛を信ずるのは——白露の百姓が沼澤中に溺ると同様、霧深き沼の中で溺死する結果となるのだ。血路は何れにあるか？ 死刑か管刑か？

管刑か空論か？

十二月十日。

ミンコーウィッチ夫人が私の部屋をノックする。

「將軍、お人ですよ。」

私は見返へつた。闕の上に白い毛皮帽子を被つた若い女が立つてゐる。化粧をした圓ほちやの顔に、灰色のドングリ眼。女は躊躇しながら、私の側に歩み寄つた。

「あなた、驚きなさるでせう？ 私はテテリナです。」

私は驚かない。彼女はかうして來ざるを得なかつたのだ。恰かも牝狼の如く追まわされ、包圍されてゐたのだ。私は椅子をすゝめた。

「おかけなさい。」

女はハンカチーフを顔にあて、泣き出した。私は黙つてゐる。音のせぬ様に戸の内側へエゴローフミフエチャが這入つて來た。

「私は……私は服務をお願するためにまゐりました……」

「服務？ 何の事です？」

「白軍に勤務さしていたゞきたいのです。」

「あなたが？……あなたはチエーカーの手先でしたね？」

女は涙に咽びながら云つた。

「無理に強ゐられたんですの……それで止むを得ず……」

「あなたの夫は絞殺されましたぞ。」

「彼男は私の夫ぢやありません。」

熱い籠が私の咽喉元を締めるやうな氣がした。この女は、この手で我が兵を銃殺した。しかも銃殺するまで散々嘲弄したのだ。夫を我々のために絞殺されながら、この女は、その仲間を賣るべくやつて來てゐるのだ。

「あなたは使ふ譯には行かない。」

女は微笑みながら眼を落した。

「何故ですの……私は何でもいたしますのに……」

「何でもする？ それぢや私が云ひつける。どちらか二つに一を選びなさい——あなたが人手を

「助らずに自殺するか？ それともこの男達にあなたを渡すか？」

エゴロフミフェヂヤが、すこしづゝ女に歩み寄つた。女はそれを信じようとしなかつた。

「あなた、御冗談でせう？」

「否。」

「だつて、そんな筈ありませんもの……」

「傳令！」

女は立ちあがつた。はじめて諒解した。もう泣かず、笑ひもせず、急にドーンと床上に倒れた。そして、よく肥つた、力の脱けた身體が、不意に波打ちはじめた。私はいふ。

「片付けてくれ。」

エゴロフが歩み寄つて、長靴で女を突いた。

「さあ起きた、悪魔女……もういゝ時分だ。」

フェヂヤは一つの眼でめくばせしながら

「奥さん、さあ、どうぞ……」

十二月十一日。

「鹽は善物なり然れども鹽その味を失はゞ何をもて之に味を和んや、爾等鹽を有てり」とルカ傳に云つてある。非常に鹹い鹽が我々の許に澤山あるが、敵の方にだつてそれはある。安樂な眩椅子や、立派な部屋や、落付いた生活といふやうな見地からするならば、我々も彼等と同じく亂暴者である。「我々は同じ聖油で塗られたものだ」私は云つたか、それはそれでいゝ。私の間ひ度いのは、幸福なる、しかしその實質に於いて賤しき生活さ、我々の罪過さは何れがよりよきかといふ事である。カシヤン聖者とニコライ聖者さは何れが眞理により近いかといふ事である。カシヤンは僧袍を身に纏ひ、敬神と祈禱を以て始終したが、ニコライは襤褸を着て、汚塵にまみれ、且つ血まで浴びた。それにもかゝらずニコライは、今、一年間に九度も祭られてゐる。我々は何を知つてゐるか？ 果して知る可能が與へられてゐるだらうか？ 「我は一匹の黒馬を見たり、之に乗るもの手に權衡を持てり」

フェヂヤは臺所で血洗女の御機嫌を取つてゐる。女は肥ちよな年増であるが、フェヂヤはあま

り嗜好そこのみをしない。彼は今日油をつけて頭髮を分けたり「白樺色のクリーム」を塗つたり大變なめかし方だ。——「美の爲」だこ彼はいふ。彼がさも勞れたやうにしてギターを弾く側に、女はヒヒと笑つてゐる。フェヂヤの心は平和に満ちてゐる。

十二月十二日。

赤軍が攻勢に轉じた。私は俘虜の赤兵達が守備する橋の方へ行つて見た。指揮者はウレデだ。河の對岸には低い灌木が一面に生へてゐる。我軍の散兵線はその灌木のかけにある。赤軍はさも氣が進まぬといふ風に、さもなぜ戦ふのかわからんといふ風に、しやう事なしに發射してゐる。橋の上には機關銃が据えてある。春の高い、人參色の頭髮をした。捲ゲートルの若い一人の機關銃兵は、私を見かけるなり愉快に挨拶をした。

「大佐殿御健康を祈ります。」

「どうだね？」

「やつて居ります。」

「何方がいゝか？」

「こちらがようあります。」

何方、此方？ 味方側か又は敵側か？ どうせ同じやうなもんぢやないが。

「何故こちらが好いか？」

彼は口を開けて微笑した。

「少くも、何のために戦ふかわかつるのであります。」

「何のためだ？」

「ラシヤのためであります。」

ロシアのため。エゴロフそつくりだ。即ちロシアは空談ではない。學校の地圖上の死んだ名稱ではない。ロシアの血屬として結び付けられてるのは乃公一人ではないのだ。これ等素朴單純な人々の心の中にロシアの聲が強くひびいてゐるのだ。ロシア……彼女に、我等の母たる彼女に、我等の生命と誠實の愛とを捧げる。

十二月十三日、

赤軍は猛烈に攻撃する。榴弾は再び炸裂し榴霰弾は再び爆音を轟かした。ゴルーブカは用心して面を河の方へ向ける。私はゴルーブカを落付かせつゝ静かに我が砲兵陣地に登つて行つた。その時、頭上近く砲車が軋つて回轉すると同時に火花を發して轟然と砲は發射された。熱した硝煙が鼻をうつた。仕方なく私は後に退つて、手綱を緩めた。ゴルーブカは塵をあげて馳け出した……ウレデが私の後を追ふて來た。

「ユーリー ニコラエウイチ、もう駄目です。」

血が私の顔に上つた。

「どうして？」

彼は平然として答えた。

「信じなさんのですか？ 御覽なさん。」

私は見た。我軍の赤兵は騎兵よりもかへつて勇敢に戦つてゐる。勇敢ならざるを得ないのだ。赤軍が勝つたら——彼等は銃殺されるからだ。けれども、もう幾度も残つては居なかつた。散兵

線はもう橋まで退いてゐる。そして山の後方、砲兵陣地の上には「ウラー」を叫ぶ聲が聞えてゐる……。

十二月十四日。

斯くて萬事は休した。

我々は退却する。何を私は成就したか？……後は——故國の杜で、前は——他國の國境だ。モスクワは何處にある？ モスクワについて描いた幻はどこへ行つた？

而して、再び氷雪を被つた森林に、馬銜や鐵蹄の音。再びゴルーブカの鼻息と革の鞍の軋る音。再び、習慣になつた——否、新しい疲勞困憊。騎兵はもう歌も唄はうまはしない……數少なくなつた彼等の列を私は振り返つて見た。ウレデは夏外套で鳥肌になりながら、伏向いて騎くエゴロフも頭をあげない。元氣を失はないのはフェヂヤたゞ一人だ。彼は毛皮の襟を立てゝゐるので暖かだ。いゝ氣持で彼は鼻歌を唄ふ。

「おいら舞踏會さ出かけたら。

舞踏會さ、舞踏會さ、

おいらこつ捕とらいて追おひ出した。
頸玉くびたまとつ捕とらいて追おひ出した……
私は號令ごうれいをかける。
「馳歩……進め！」

第二篇

七月三日。

グルーシヤは薔薇色のコフトチカを着て草の上に腰を下してゐる。夕暮が迫る。生ぬるい空気に蚊の鳴く聲。

「グルーシヤ、わかつた？」

「わかつてよ」

「何人？」

「みんなで三人よ、此方から行くと四軒目の右側の家に居るの、朝からサモゴンカ(自宅で醸造するウオートカ)ばかり飲んでるのよ」

「都會まちの者がかい？」

「え、さうよ、ルジヨフから来たんですの、亚麻色の頭髪をした男は工場の労働者で、髯もじやなのは坊さん上りよ、それねえ、もう一人の奴は寫字生ですつて」

「執行委員會の連中かね？」

「さうよ、あそこのならず者共よ……鐵砲てつぱう紙をもつてるの、その紙でねえ家鴨の子を勘定する

んですつて……」

女は白い齒を剝いで笑つた。臍で顔を覆ふやうにして笑ひこけた。

「グルーシヤ、恐かあないか？」

「わたし恐いこまないわ、彼奴等位、わたしにだつて絞殺しごころせるわ、夜半よなかにあの家に忍び込んで、絞めてやるのよ、あんなやくざ者は三人で三哥よ、殺したつてかまわないわ」

「そんな事云つて、お前銃殺されるぞ」

「大丈夫よ……林へ馳かけて来るから、ねえ、あなたの許へ遷うつげて来るわ」

私は女おんなと並んで腰を下してゐる。女は伏目になつて、おづ／＼と私を押しやるやうにした。

「旦那……ねえ……人が見るのよ……」

七月四日。

我々が林に這入つてからもう四週間になる。こゝに「一團の徒黨」が二十六人蟠居してゐる譯だ。今、我々について種々の傳説が行はれてゐる。曰く、我々は二箇師團の兵力だ。曰く、我々

はカルーガを占領した。早く、我々はモスクワに向つて前進してゐる。——こんな風に百人の口から傳播される噂は、さうく農民が自己の政權を樹立して「悪魔」共を責罰してゐるさういふ風説さへ生むに到つた。附近の村々はすつかり我々を信じきつてゐる。この調子ではストルブツイ。モジャールイ。ズーボチ及びスイチエフカ等を起たせることも必ずして困難ではない。たゞ問題は、その時期と、期間だ。

私は今日黎明に起きて、道なき所を逍遙した。脚下には蕨や苔が生へ、頭上には夜の雨に洗はれて透き通つた空がかゝつてゐる。太陽はまだ出ないが野生の夷莓の上には、もう密蜂がブンブンいつてゐる。私の眼はひきつけられるやうに密蜂の後を追ふた。彼等は短かき夏を生き、彼等は長からぬ生命である。彼等は勤勞し、我等は闘ふ。彼等は密房を遺し我等は……一體何をのこすだらう？……

私は「綠軍」私は緑の林にかくれてゐる。私は幸福だ。ロシアのために闘ふ私は幸福だ。

七月五日。

夜おそく、畑を通つてストルブツイに行く。私とエゴーロフとフェヂヤとだ。茴香、麻の香が強く鼻をうつ。月が照つてゐる。白い包を被つたグルーシヤの背高き影が、月光に浮いたやうに見える。女は私に囁やく。

「こちらよ……こちらへ。」

我々を村の裏路から案内した。四番目の右側の小さな家。私は注意深く窓を叩く。

「誰だ？」

「主人、ちよつと出てくれ。」

門の外れる音がして、戸のかけから頭が一つ出た。「坊さん上り」だ。彼は腰の邊をボリボリ掻きながら、周囲を見まわした。

「ルジヨフから来たタワールシチ？」

「さうだ……お前は誰だ？」

私はそれに答へず、手をあげて狙ひもせず引金をひいた。黄色の火焰が閃いて、煙は根裏を這つた……私は外へ立つてゐた。エゴーロフとフェヂヤが家の内へ這入つて行つた。月は照

り渡り、人影絶えたる街路の、門の邊にはグルーシヤが立つてゐる……彼女は唇を半開いて、幾度か重い溜息を洩した。そしてどうしても立去らうとしなかつた。私は云つた。

「グルーシヤ、もう家に歸つたらどうだ。」

女は少し慄へながら

「いえ……どうせわたし……待つてるわ……」

七月六日。

エゴローフは云ふ。

「私達が部屋に這入りますミ、それ、あの亞麻色の頭髪をした畜生が私に飛びかゝつて手に嘔みつくんでさあ、それをフェヂヤがよし來たと許り疊んでしまつたんです。もう一人の野郎は暖爐の上の寢床に匍ひ上つてブルく慄へながら「命ばかりはお助け下さい」ミ拜むんであります。私云ふてやりました——「碌でなし奴、貴様も上納の納め時ぢや、神様に最後の祈でもせえ」……往生際の悪い野郎で、まだぶつ／＼泣き事いふんです——「命を助けて下さりや、まじめに勤めま

ず、帳簿つけをやります」……彼奴の顔面は一面に血を浴びて、眼球が飛び出して、糸のやうな筋にやつみぶら下つてるんです。それでゐて帳簿の講釋ばかりしくさるんです。阿呆らしい……嘔言吐きつたらありやしません……」

眞晝中。蒸暑い。陣營は空虚だ。或者は歩哨に立ち、或者は斥候に行き、或者は眠つてゐる。大きな楓樹の下には「徒黨」共がアクリカ(カルタの一種)をしてゐる。餓鬼大將は勿論フェヂヤだ。彼は狡猾さうに微笑したり、一つの眼で眺(のくは)したりしながら、こつそり胡魔化してゐる。彼は一度だつて「アクリカ」になつたりなんかしない。「やはり運がえゝよ」……エゴローフは意地悪い眼つきで、ながいこゝ見て居たが、とう／＼憤つちまつて唾液を吐き散らした。

「チエツ！ 煙草は薰べやがる。カルタで鬼共の御機嫌は取りくさる。邪教徒の罰當り共……今に見てろ、未來永劫の火に焼かれるぞ、神様はお前達の罪業はお許しにならんぞ……」

七月八日。

イワン、ルキチはもこ「サウエートの仕事」をしてゐた男である。昨日まで彼は執行委員會で會

議をした。「試験」のために器械的にマルクスを學んだ。そして「全露中央執行委員會」に絶対に服従してゐたが、今日からは我々と一緒に林の中に住んでゐる。背は高くないが肩幅の廣い——風采はあがないが頑丈な男だ。もと寺男の子で「不行跡」から神學校を放校された履歴の持主だ。彼は單身、寸鐵を帯びず、番兵哨所を過ぎて私の許へやつて來た。そして沈んだ面持で云つた。

「前以て云はにやなりません、本來私はボリシエヴィクです」
私は非常な興味を感じて彼を眺めた。

「私を綠軍グリンに使つては下さりませぬか。」

「ボリシエヴィクで——綠軍に？」

「さうです、共産黨の馳走は十分味はつて見たんですが、もう澤山です……早かれ晩かれ、どうせ天下はあなた達のもんです。」

「我々のつて、誰の？」

「農民の」

私は彼の開けつ放しなのが氣に入つた。そしてブラウニングを渡し、給金を支拂ふ事

にした。

「君は知つて知らんが、我々は絞殺すれば掠奪もしますよ。」

「共産黨員をですか？……勿論、彼奴等はさうしなくちやありません。」

「何故だね？」

彼は少し眉根を寄せた。

「最初、私はまるで馬鹿のやうに彼奴等を信じました……所で彼奴等、嘘言ばかり吐いてるんです。恥知らず共です。他人にや生きて行けぬやうにしめて、自分の懐を肥やすことばかり考へてるのです。」

七月九日。

夜半にダルーシヤがこつそり忍んで來た。——跣足で街道をやつて來たのだ。彼女の眼の輝きは私の心を波立たせる。彼女の若々しい身體は私の胸を締めかせる。彼女の内には消耗しない力の剩餘が満されず殆ど獸の様な渴望となつて充滿してゐる。大地は平和に息つき、銀河は靜かに光り

「徒黨」達は子供の如く眠つてゐる。たゞ私ミグルーシヤの中でのみ焼く様な情火が燃えてゐる。けれどもグルーシヤは、やはり自分のものゝやうでない。罪のない彼女の「情郎——可愛い方」さいふ言葉は、私にはしつくりと來ない……私はオリガを想出す。そしてこれはグルーシヤでなく、オリガが私を抱擁してゐる——オリガが私の接吻をもとめてゐるさしか思へない。オリガ。我々を引離した井戸の底は何處にあるか？

七月十日。

「稻妻ミ、雷鳴ミ、そして聲々ミが起り、驚くべき大地震が揺つた」(革命を指す)……併しながら、手風琴は今もなほその昔に變らず紅い音色に鳴り、若衆は之に和し、だみ聲あげて俗歌を唄つて居る。村の端れには頭髮の白茶けた、勿論、虱だらけの小供が掴み合つてゐる。家々にはサモゴンカが燻り、燈用木片がブチ／＼と音を立て、樹脂を滴らして居る。(革命後電燈やランプがなくなつて、或る所では昔の如く木片を燃して燈と)またあまりに亂發さるゝ悪罵の言に空氣が重くなつて、そこに斧がかゝりさうである。(農家の鼻もちならぬ悪臭などを形容して、その臭にば斧がかゝるとロシア人は云ふ)そしてそこには、以前と同じく掘り返された畑と、以前

と同じく乗物では通れない村道がある。けれども特筆せねばならぬのは、そこに今もなほ「蟹が冬越しする」事だ。(帝政時代には、身上のものが部下や庶民を脅すのに「蟹の冬越しする所をいせて」何處に「稻妻や、雷鳴や、聲々」があるか？ そんなものはありはしない。有るのは全露國の百姓が皆管打たれてゐるといふ事實だけだ。そして、そこから血が流れ出たのだ。

グルーシヤの父、ステパン、エゴリツチは以前は何不自由なき「中産農民」であつたが、今はすつかり磨つてしまつて貧乏してゐる。私は彼に農民達が何故「白軍」を援助しなかつたかを問ふた。彼は少し考へた。

「旦那様、その事をお前様にどう申し上げたらえゝだか、それは百姓の氣儘からばかりぢやねえだ。お前様、それは斯うですが。俺は御覽の通り何一つもたぬ貧乏人です、蜘蛛が聖像様の上に巢を張るやうな廢屋住ひです、ぢやがそれでも一家の旦那ですが、若し將官方の世の中になつて御覽ぜろ、俺もお釜を起すか知れねえだが、主人にやなれねえだ、また候お邸宅の召使に引つぱられめえとも限らねえ。そらいふ譯がありますだあ……」

「だつて、お前達は以前の通り今も叩かれてるぢやないか？」

「叩かれさる。さうぢや、叩かれてはをるが、今叩えさるのは自分達の仲間ですがな……工場のものにしろ、百姓にしるどうせ仲間です……俺等は、仲間のならず者になら勝つこゝもありません、ぢやが貴族が來ちや叶はねえでがすよ……」

そして『蟹が冬越し』するのは、地主の邸宅か。

七月十一日。

イワン ルキチはゾホウシチナに行つた。彼は報告していふ。

「私はいきなりその家に這入つて『タワーリシチ、手を舉げい！』をやつた譯です。するに百姓共びつくりしちまつて、皆床に膝をついちまひました。鍵をもつてゐる支配人の奴は「アタマン殿、鍵はこれです」と押しつけるやうにそれを出しました。私は、更紗や、釘や、皮革や、靴の底皮等の商品を窓から投げ出させ、百姓共に『皆でとれ……これはお前達のものだ』と云つてやつたんですが、恐がつて誰も手を出さうとしないのです。それで私は一人の男の頸筋をたいて、『でくの棒取れ……やるよ』と吐鳴つてやりました。それで皆が分け取をはじめたんです、馬車

なんか引つぱつて來たんです。すると支配人の野郎、共産黨員なんです、しばらく立つたまゝ忌忌しさうに見てましたが、帽子を床の上にたゞきつけて——「えゝ畜生奴！俺一人指を銜へてるのは馬鹿らしいや……」といつて、馬車を引つぱり出しました。共産黨員のことは私よく知つてます、みんなこんな連中です。」

彼はサウエート紙幣十億留持つて歸つた。私はこれを金箱に納れて、番兵を立てゝ置いた。私は『徒黨』達を警戒するのだ。監視して居ないに仲間のものだつて盗むにきまつてる。私も云ひ得るだらう——『緑軍のこゝはよく知つて居る、みんなこんな連中だ』と。

七月十二日。

グルーシヤが私に云ふ。

「何時ルジヨフを奪るの？」

「ルジヨフを？」

「さうよ、いつまで便々ミ暖爐を冷し(安逸を)てる譯にや行かんぢやないの？」

「暖爐を冷やす？」

彼女は笑つた。

「當前よ、こゝはまるで極樂ぢやないの。馬もあれば牛もあり、羊もあればサモゴンカもある、何だつて無いものはありやしないわ。それに旦那様のやうに卓布の上で食事をしてさ、商人の主婦さん見たいに毛皮外套の上に寝たりなんか……御覽、あの片眼がよくも喰ひ肥つてること……」

「フエヂヤの事か？」

「さうよ、あなたん許の絞首人よ。」

「グルーシヤ、お前はこんな生活が羨ましいのか？」

「馬鹿仰言い、ロシア人達が待つてゐるぢやないの？」

「何を待つてゐる？」

「あなたが莫斯科へ入るのをよ。」

私は女に目を注いだ。女は薔薇色のコフトチカを着て、跣足で、私と並んでゐる。その黒い眼には不安や動搖の影も認める事は出来ない。女は私が莫斯科へ行かねばならぬと信じて居る。

「百姓達はどうしてあなたと一緒にならないでせう？」

「力がないんだよ。」

「わたしにも力がないのよ。」

「お前……お前に力がないんだつて……」

女は何か云はうとしてゐるが、云ふべき適當な言葉を知らないのだ。女の考へでは私には何でも出来ない事はない。「運命は私に戦ふべく命じてゐる」と信じてゐる。

七月十三日。

夕暮れから私は陣營に歸つた。太陽は西に入つて、林の中は闇が濃くなつてゐる。遠くから人聲が聞える。「アクリカ」をやる楓樹の下に薪を積んで火をつけ、そこに「徒黨」達がわい／＼云つてゐるのだ。赤い火の舌がペロ／＼／＼何かを舐めてゐる。

「エゴローフ」

彼は薪を火の中にくべて、それから急がうこもせず私の許へやつて來た。

「何事だ、エゴローフ？」

「煽動者のタワーリシチをちつこばかり焼いています」

「何だこ？」

見るに、楓樹の側に人が括りつけられてゐる。それはモジャールの百姓シニツインだ。膚を出した肩が煙を透して白く見えてゐる。毛深な、そして生へ放題に生へた眞黒な顎髯も見えてゐる。

「馬鹿！」

「大佐殿、さうではありません、この呪はれた畜生を一體どうすりやようがす？ 棒で叩き殺しちや時間が大變です、さいつて絞首されちや本人の恥です、それで焼いちまふんです。」

私は放つこいた。放つて野に出て行つた。

「フェヂヤ、顎鬚に火つける」

「さういふ聲がきこえる。」

七月十四日。

フェヂヤは動物を愛する。彼は愛を以て馬を世話し、愛を以て牛の乳を搾る。「言語を有せざる動物」が彼には友である。彼は仔犬の『カシタンカ』を拾つて、懐に入れて陣營に持ち歸つた。この黄色の斑點をもつた、小さな仔犬は、不器用に革を舐めたり、フェヂヤの長靴に鼻の尖を押しつけたりした。フェヂヤはまるで探母の如く犬を膝にのせてやり、自分の櫛をもつて梳つてやつて、それから石鹼で洗つてやつた。静かだが暑い日だ。フェヂヤはブスコフ訛で唄ふ。

お山の上で、山の上で

そこで蚊共が喧嘩した

二疋笑つて

そして二疋は殺された……

七月十五日。

夏の雨が私を眼から覺醒させた。ほの／＼と明け行く。林の中にサラ／＼とさういふ静かな雨の

音が聞えてゐる。すべてじめくして、陰氣だ。私は起きた。番兵がテントの側に眠つてゐる。他の「徒黨」共は雜魚寝してゐる。彼等には『如何なる事』でも何でもないのだ……彼等はもう久しい間恐怖いふものを忘れてゐる。私は雨の臭を吸ふた。私はその捕へられないやうな響を喜ぶものである。そして濃く、冷たい空気を吸ひつゝ心はいつまもなくまどろんで行つた。再び——陣營なく、私なく、『徒黨』なく、林もない。在るのは永遠なる、一個の、祝福されたる人生のみである、そしてどこかにオリガが居る。

七月十六日。

グルーシヤは手で顔を覆ふてホホムミ笑ふ。肩が揺れて、高い胸が波打つ。私は問ふた

「何だね、グルーシヤ？」

女は笑ひこけて噎てゐる。

「おかしいよ……本當に可笑しいのよ……あなたの絞首人ね、あのフェヂヤ、モシエンキンは……」

「どうした？」

「わたしに氣があるのよ……わたしにアグラフエナ ステパノウナなんて父稱で呼んだり、こないだはリボンを呉れたが、今日はまた一留銀貨を無理やりに藏つていふの。わたし、一度頬邊をなぐりつけてやつたの……するさあの人こんなに轉げまわつたのよ、」

「グルーシヤ、何故そんなにいちめるのさ？」

女は急に笑ふこゝを止して、嚴格に正面から私の顔を見た。

「なぜつて？……ぢや、わたし放蕩娘なの？……あなたは巫山戯てるこゝになるの？……だつたら、それは私の罪ぢやないわ……」

「誰の罪だ？」

女は黙つてゐる、フェヂヤは競争者だ。

七月十七日。

ウレデはカルーガの先まで行つて、アレクシン附近でコムミサルの乗つた汽車を爆破させ、分

捕品を持って歸つて來た。澤山の金、澤山の寶石、三つの戦利品——機關銃と「縣チエーカー」のスタンプと赤旗勳章を得たのだ。フェヂャは非常な御機嫌だ。「これまで胸着き帳面しかなかったが、今は誰か茶代を呉れさいつても困りはせぬぞ」。私は彼を莫斯科へ金の交換にやつた。フェヂャが換へて歸つたらそれを附近の百姓共に分與しよう。百姓共は勿論、それを林の中に埋めるだらう。

テントの側でイワン　ルチクとウレデミが議論してる。ルチクは煙草を喫しながら云つて居る。
「君、考へて御覽なさい、君は中尉ださいふが、中尉なんてものはずつと前からありやしないよ、過去に葬られてるよ」

ウレデミは怒つた。

「所で君はボリシエヴィクだ」

「だからどうしたんだ、ボリシエヴィクだから何だ？……君の頭は名譽さか、ロシアさか、國民さか、屁の足しにもならんもので一杯だ。僕は君達の「理想」には唾液でも吐きかけ度い。僕は生活があるがまゝに、修飾せずに取り入れるのだ」

「ロシア——が潤飾だつて？」

「さうですさも、ロシアだつて潤飾だ。君はロシアの事なんか一切考へなさんなよ、そして自分の仕事をせつせとすればいい。蟻は偉い。我々は蟻を手本にして、自分の藁莖を運ばにやらん」

「君はどんな藁莖を運ぶ？」

「今の所、君と同じだ。だが、時が來たら別々になるぞ」

ウレデミは冷笑するやうに

「君は勿論、國際共産黨へ行かうてんだらう？」

「國際共産黨になんか行くもんか、彼處は小店で、山師の集だ。……僕は農場でも買はうと思つてる。所で君は……もう過去の人だ、君達は滅びるのだぞ」

「誰が僕等を滅ぼすか？」

「この乃公のやうな者が」

ウレデミは怒つて出て行つてしまふ。蒸し暑い空に雷鳴が感ぜられる。カシタンカはフェヂャが居ないので淋しがつて、悲しさに泣き叫ぶ。

七月十八日。

イワン ルチク再びウレデミ口論してゐる。ルチクの神學校仕込のバースの聲がきこえる。

「白軍は屑ですよ……中尉殿ももういゝ可滅にさこつていゝ時分です。」
ウレデはいつもの通りに憤々した。

「白軍は屑？ よろしい……ぢや聞くが、それは一體何故だ？ 掠奪や、銃殺や、笞刑をやつたからか？ さうだつたら縁軍はどうです？ 掠奪しないだらうか？……私は汽車を襲ふた。笞打たないだらうか？……昨日君はカブリユグを引ばいたぢやないか。何のためひつばいた？ 泥酔したからつて、たゝいていゝものか？……銃殺はしないか？ その代りに薪で焼き殺すんぢやないか……君は何で白軍の悪口を言ふ？」

「僕は悪口云つてるのぢやない。白派が死んでるといふのだ。死骸の臭がするこいふだけだ。太皇殿下だの、金の肩章を載せた将官だの、皆さうぢやないか。所で縁軍は譯が違ひます、縁軍は新しい生活を建設してゐるんです」

「労兵會のか？」

「いや、さうぢやない。だが労兵會だつてかまやしない。労兵會はゼムスキーの役所(帝政時代の地方自治體)と較べて何處が悪い？」

彼等の口論は何時果つべしとも思はれない。何を彼等は争つてるのか？……白は死んでゐる。が縁だつて神の天使ではない、それに赤は轉んだ棺だ。新生活？……それは何處かで建設されつつある。何處にだ？ 誰によつてか？ 如何なものであるか？……手に權衡をもつた騎士は何處に居る？……

七月十九日。

昨夜私はまんじりともしなかつた。胡桃の林を風が渡つて、テントが微かに顛えたりグラ／＼動いたりした。楓樹の梢は恐ろしい音をたて、風に吠えた。だが、暫時すると、すべてひっそり静まりかへつた。それから炭のやうに黒い空の所々が千切れて灰色に見え、林の周圍は帯でもしたやうに薄明るくなつたが、密林の内部はかへつて暗かつた。

そしてすぐに恐ろしい勢で雷が鳴り、強く又柔かく暖かな雨を叩きつけた。闇の中からエゴロフが出て来た。

「イリヤ、ブローロフ神父が、二輪馬車で雲の中にユダの野郎を追つかけて居なさるんです」「何でユダを追つかける？」

「野郎また地獄から逃げ出したのです、主がイリヤ様にエダを捕へるやうにお云ひつけです、イリヤ様はもう野郎をお宥しになりますまいて。」

エゴロフは二本の指で十字を切った。そしてながい事黙つてゐたが、欠伸をした。

「雨も雨……何といふ雨だ。主よ許し給へ、恵を垂れ給へ……」

「シニツインの祟か？」

「シニツイン？ シニツインは懺悔もせずにくたばりました。今、ユダと一緒に地獄に居ることせうわい」

七月二十日。

モケイチは四年間も林の中に潜伏する古い『徒黨』である。私は彼を斥候に出した。彼はルジヨフにもウヤジマにも行つた。ウヤジマで彼は捕まつた。けれどもチエーカーから逃げた。歸つて来たのを見る顔には青血の集つた打傷があり、脊面には董色に脹れあがつた打撲のあとがのこり、一本の指は切り取られてゐた。彼が云ふ通り拷問されたのだ。彼の報告によると、赤軍は攻撃の準備をしてゐるらしい。實際、大砲で雀を撃たうとするのだ。我々は僅に二十七名だ。我々は明日數千人にならぬものでもないが、しかしそれは數千人の軍隊ではない、農民だ。燻つてゐる我々の火元から猛烈な炎は燃え上らない。全露國に燃えひろがるやうな火事には中々なるものでない。『老人達』は『時節を待て』と云ふが、私は待つ事はいやだ。だが、敵の力の強いのはどうする事も出来ない。

エゴロフがモケイチの治療をしてゐる。サモゴンカを飲ませ、瘡口に『藥草』を擦りこんでゐる。モケイチはフー／＼云つてゐる。彼は、一本の指を切られたかわりに、敵の指を百一本切つてやると言つてゐる。彼はモスクワの布告をもつて来た。それには斯う書いてある。『ルジヨフ郡にはアンタント及び白衛軍に雇はれた一團の徒黨が狼藉を働らいてゐる。タワリーシチ、我が共

和國は危險に瀕してゐる。タワリリシチ、起つて徒黨勦滅のために戦へ、エルスエフエスエル（露西亞社會主義聯邦サウエート共和國）萬歳！……私がこの布告を音讀するのを聞いたエゴローフはベーツと唾液を吐いた。

「何だ、エルスエフエルか、馬鹿々々しいや、何も祕密にするものはない、正直に『反基督教者』とやつたらいい」

七月二十一日。

グルーシヤはオリガが白いレースの夏服をつけ、傘をさして路上に立つてゐる寫眞を見つけ出した。私は他所行姿でない服装の、しかもよく彼女に似てゐるこの寫眞がすきである。これはサコリニツクだ。返らぬ過去だ。

「この女は、あなたの何に當たるの？ 妹さん？」

「いや、僕には姉妹はないんだよ。」

「だつたら許嫁の女？」

彼女はカーツとした。顔に或る影が走つた。

「許嫁か、でないかわたしの知つたこごぢやないが、立派な貴婦人ねえ……どうして牛飼風情のわたしなんかこんな女と競争が出来るもんか？……」

「グルーシヤ」

「さうよ、立派な邸宅に住んで、黄金づくめの衣装をつけて、銀の踵の靴なんか穿いて……」

「グルーシヤ、何を云つてるんだお前は……」

「わたし、ちやんと知つてるわ……あなたは私のやうな百姓娘はたゞ慰み者にして、貴婦人を奥さんになさるつもりなのね、どう、當つて？……旦那、さうでせうが？……」

私としてそれに何ミ答へ得るか？ 黙つてゐる外なかつた。女は私の沈黙が何を意味するかを解釋した。

「だから、あの女のこみを想つてらつしやるのね……」

そして靜かに立ちあがつた。

「でも仕様がないわ……それがわたしの運命だつたら……」

七月二十二日。

グルーシヤは息を切らしてストルブツイから駆けて来た。

「赤軍が復讐に来たの……機關銃を持つて……百五十人ばかり……」

「特別派遣隊か？」

「さうなの、あなた記憶てるでせう、あの、ほれ三人が泊つてた家、あそこのクジマ爺さんを捕まへて、散々ひつばたいたの、爺さんはびくもせず『吾父』と祈禱をやめないんですつて……するこ頭目が『何を祈つてけつかるか、このヨボ〜、早く白状しろ』……つてねえ、あなたまたピシ〜叩いたんですつて。クジマ爺さんは跛ひいて歸つて来たの、そしてペーチカの上の寢床に寝ついたので、でもしつかりしてるわねえ、息子のミシユツカを枕邊に呼んで『ミシユツカ、俺がひつばたかれた事はどうでもえ、お前は鐵砲持つて惡魔共を殺して來い。お前が殺されたらセルゲイをやる』ていひつけたの。赤軍は、村を片つばしから家宅搜索してるのよ、牛や馬や羊から犬の數まで數へ、武器をさがし、誰があの人達の磔でなしを殺したかを穿鑿してるの、村では老人は皆ひつばたかれ若い者はみんな西伯利に流されるつていふ噂がひろがつて大變よ……お、

神様、村の者はほんまに蠅見たいに死んぢまふでせうか？……」

彼女の眼は乾いた輝に燃えて居る。唇は一文字に結んで、私の答へを待つてゐる……彼女は私の返事を知つてゐるのだ。

「グルーシヤ、今夜、夜半に乃公をサロビヒンの泉の許に待つて居れ。」

女は諒解した。喜んだ。そして囁やいた。

「奴等を殺して頂戴、殺してね……一人も生きのこらぬやうに、罰當り共を懲殺にしてね……」

七月二十三日。

私は最も信頼する『徒黨』十五名を抜き、これを二隊に分けた。一隊は自ら率ゐ、一隊をウレデに指揮させた。私はサロビヒン泉からストルブツイに向ひ、ウレデは本道を行く。午前二時の出動だ。

私はライ麥の畑に部下を遺し、一人で畑の畔を村へ行つた。夜明前で星があか〜と輝いてゐる。村の端れには番兵が立つてゐた。

「誰だ？」

「見えないのか、聞ぬけ」

私は赤軍の兜を被り、赤軍の外套を着てゐる。腕には鍵型の幹部章がついてゐる。

「聯隊本部はどこだ？」

「右へ行く寺院があります、その傍ですタワーリシチ」

村ではない、眠の國だ。『復讐者』も又彼等をたゞくべく準備する百姓もひとしく眠つてゐる。

私はグルーシヤの父を想出した。「……叩かれてはをるが、今叩えざるのは自分達の仲間ですがな……工場のものにして、百姓にして……」寺の周囲の土堡の蔭に煙草の火が見える。私は拳銃を掴み出した。

「こゝは聯隊本部か？」

「さうだ、お前は誰だ？」

「タワーリシチ」

「タワーリシチか、証明書があるか？」

拍車の音をさせて彼は立ち上つた。その時私は云ふ。

「手を上げい？」

彼がサーベルに手をかけた時、私は彼の胸間を撃つた。そして玄關に飛上つた。櫛の戸がギョツと軋つて開いた。急に黄ろい光の中に出たので眼がよく見えなかつた。寢臺の上には「タワーリシチ指揮官」が寝てゐる。三人だ。卓上にはサモゴンカが乗つて居る。再び云ふ。

「手を上げい！」

私は左から順々に彼等の額を撃つた。そして、落つて、注意ふかく室内を見まわした。けれどもその時は街に喧騒が聞えてゐる。ウレデやエゴロフだ。『ウラー！……ウラー！……ウラー！……』私は昇降口へ出て行つた。村には銃をもたぬ人々が襦袢一枚で掴み合つてゐる。鶏が咽喉一ぱいに啼いてゐる。

七月二十四日。

ウレデは「軍事委員」を捕虜にして陣營に引つばつて來た。鼻眼鏡をかけた若い男、大學生の

出身だ。長靴はモケイチがとりあげたとかで彼は跣足である。縮み上つて左右をじろ／＼と疑深い眼で見まわしてゐる。

「お前は共産黨員か？」

彼は眼を落した——さうだこは云ひ得なかつた。私はその瘠せた、そして驚ろきのために蒼ざめ歪んだ顔を見入つた。

「お前は絞首する。」

彼は塵芥の上に膝突いた。膝づきながら私の方へ匍ひ寄つた。

「タワリーリシチ！……タワリーリシチ大佐！……慈悲を以て許して下さい、僕はまだ若い……」

「若い癖に中々喰へない奴だ……」ミエゴローフが混ぜかへす……「立て！餘計な舌叩くな」

「僕はまだ若い……僕は勤めさせて下さい……」

「何に勤めるんだ？」

「國民に……」

「へん、國民に勤め度いは、笑はせやがる」エゴローフがいふ「この悪魔が、阿呆奴！」

「徒黨」共がドツ笑ふ。奴等大喜びだ。「軍事委員」だ、而も大學生だ……彼の長い鼻から鼻眼鏡が落ちた。下を向いた睫毛が瞬きはじめ、目から涙がこぼれた。

「タワリーリシチ大佐！タワリーリシチ大佐！」

私はテントの中に歸つた。テントの中から私は撃たれた兎の泣く様な聲を聞く。

七月二十五日。

陣營の後に小河が流れてゐる。ドニエブルの支流、ウズモスチャ川だ。私は手で小さな楊柳を握つて——水の静かに流るゝ汀に——下りて行く。莎草に顔はひつ搔かれ腐つた木の皮に足がたむる。私は川の流に沿ふて泳いだ。川を横ぎつて蛇が泳いでゐる。蛇は裂けた舌をペロ／＼と出しながら黄色の頭を擡げ、私のつくつた波紋の浪の中に潜り込んだ。私は蛇を見、高い太陽や、銀色に放射するその光線や、青々／＼岸を覆ふたはんの木類やを見てゐる、現實を信ずることが出来なくなる。明日も果して今日と同じだらうか？ 明日も果して再び「紅の液汁」が流れるだらうか？

七月二十六日。

密林の中で気が荒まない様に思つて、私は二三冊の本を用意して來た。聖書ミブーシユキンミバラツインスキイの詩集だ。今日、丁度いゝ所を開いた。

見る／＼空は曇り來ぬ

四邊は暗く憂鬱に

風は塵芥と木の葉を

大空高く吹き去りぬ

哀れなるかな我や人間

運命の氣息は渦巻きて

絨毛の如く飛ばされぬ

雷鳴る空高く。

この時は我々をうたつたのではないか？ 我々は「絨毛」ではないか？ 絞首された「軍事委員」も、焼殺されたシニツインも、半殺にひつばたかれたクジマも、フェヂヤも、エゴーロフも、モクイ

チも、我々すべて緑軍も、赤軍も、白軍も——肥料も、ロシアの種子も皆「絨毛」ではないか？……

黒雲、我をこりまきて

み空に我を運び行く

大地に號叫び泣く聲も

暴風の音に消えて行く。

七月二十七日。

モスクワからフェヂヤが歸つて來た。彼の新しい青のジャケットを着て縞のズボンを穿いた粉飾は、まるで田舎廻りの曲馬場の馬術師だ。彼は大得意だ。そしてしば／＼ポケットから懐中鏡を出しては頭髮の分け目に櫛を入れる。「わたしに氣があるのよ」……私は問ふた。

「どうだ、交換したか？」

「大佐殿、交換しました。」

「どれだけ？」

「二千五百磅であります。」

彼は豊かなモスクワの生活について話しはじめた。「徒黨」はフェヂヤを取りまいて、夢中になつて聞きこれてゐる。木々の梢には黄金色の夕陽がかゝつてゐるが、下の方はもう黄昏だ。蚊がブンブン鳴きつゝ圓舞をしてゐる。

「人間は人間ぢや、やはり人間式の生活くらしをしてゐる。ルレトカ（賭博）もやれば外國のキユー酒も飲み、娘つ子達をローレライスに乗せたりしてゐる。一言に云へばクスネツキー・モストだ。午後四時頃街路に出て見ろ、それはまた素敵な賑ひだ。速歩馬、ソヅコム（コムミサ）、ネツブマン（新濟政策）、コムミサル、等、等、……戦前のモスクワも少しも變つた所はない。それで労働者の天下ぢやからね……だが、どうだ、我々は林の中で野暮なキノコを採つてゐるちう譯か……」

エゴローフは灰色の眉を寄せた。

「餘計な舌をたぐくな、フェヂヤ、誘惑しちゃいかん」

「何だつて？……手前が莫斯科に行きたかつたのか？」

「黙れ、悪病奴……お前悪魔になりをつたな、本當に仕様のねえ野郎だ」

フェヂヤは笑つた。指を切られたモケイチも、この頃さんくなくられたカブリユーガも、セニカも、フレドシチエニヤも、皆、林の中の縁の兄弟達は笑つた。皆は愉快だつた。そして皆が羨しかつた。どこか世界の端に、遠い莫斯科に、「下郎共が出世」して、「人間が人間式の生活してゐる」のが羨ましいのだ。

「人間式の与娘つ子達をローレライスに乗せ……私は自分に問ふ——我々は種子か、或は單に肥料か？」

七月二十八日。

イワン・ルチクは主計をやつてゐる。彼は今日磅を勘定してゐたが、急に顔を曇らせた。

「本當に仕様のない奴等だ……金を盗まれました。」

「澤山か？」

「三百五十磅足りません。」

一番悪いのは家内の賊だ。私は『徒黨』共を整理させる様に命じた。『徒黨』共はシニツインを焼殺した例の『アクリカ』の楓樹の下に三列に並んだ。細い雨がそほ降つてゐる。

「氣を付け！」

彼等は軍隊式に眼を右へ向けた。そして打沈んで、私が何をいふかをまつてゐる。私は云つた。
「昨夜金を盗まれた。盗んだ者は出て来い」

後の列でぶつ／＼云つてる奴があつた。カブリユীগだ。彼は低い聲で呟いてゐる。

「誰の金だつて？自分達のものぢやないか？……盗りに行く時は一緒に来いと引っぱり出して、分け前はやれない方があるか？……どうじや仲間、おれのいふのは間違ふとるか？」

カブリユীগは水兵の出身だ。けれども彼は『革命の誇や裝飾』ではない。泥酔漢で、無頼漢で、泥棒だ。私はポブルイスクで彼を俘虜にこつて以來『徒黨』に入れてゐる。

「カブリユীগ」

彼は返事をせずに他人の背後にかくれた。私は繰り返へした。

「カブリユীগ」

彼はやつこの事で列を出るには出た。ポケットに手をつき込み、帽を後頭部にのつけて居る。

足はよろ／＼だ。酔つてゐる。

「帽子をとれ！」

「何故？ 帽子はとりません、こゝはお寺ぢやありません……」

私は精一ばいの力をこめて、彼の頬桁をなぐりつけた。

「だまれ！ お前盗んだか？」

彼は顔の血を腕で拭つて、ぶつ／＼いふ。

「泥棒した？……いゝえわしは泥棒なんかした事はありません……たゞ取りましたよ……大佐殿、自分のを取つたまでゝあります」

「自分のを？」

「さうであります、自分のを……」

「絞首」

エゴーロフミフエヂヤが彼の許に歩み寄る。厭々する雨がまだ降つてゐる。

七月二十九日。

林の憂鬱が私の心を齧る。私は監獄に居る様なものだ。木々の枝は模様をついた格子だ。木の葉のサラ／＼と鳴るのは手枷足枷の鎖の音だ。陣營は装飾もなき四つの壁だ。フエヂヤ、エゴローフウレデの取りまいた囿内から私は出て行けぬ。笞、絞首臺、銃殺等から遁れる事は出来ぬ。『身邊の事象悉く我が心を碎く。私は心から慰藉を求めたが、ない。慰藉者を待ったが、ない……』オリガは何處に居るか？ どうしてるか？

七月三十日。

さあさ集れ娘共

おらはラツバを見つけたぞ

ライ麥の中で見つけたぞ

ラツバはお禿で毛がなくて

掴まうとすれば逃げまわる……

フエヂヤは草の上に半ば横になり、大型の手風琴を引いてゐる。例のジャケットを着て、クロム色の長靴をはいてゐる。

「フエヂヤ」

彼は跳ね起きた。

「大佐殿、何で御座います？」

「者共は、どうだ、神妙にしてるか？」

「え、溫柔しうなりました……チトフミフエドシチエニヤミを叩いてやつたらいゝかと思ひます、そしたら皆がよく呑込むだらうと思ひます」

「彼奴等もやはり盗んだのか？」

盗んだ譯ぢやありませんが、……用心のためにと思ひまして」

彼はカシタンカを撫でゝやつてゐる。カシタンカは巫山戯てフエヂヤの指を嚙んでゐる。フエヂヤは笑ひながら

「ウフ、齒なしの野郎……ウフ、けだもの野郎……、大佐殿、私達の仲間には、大佐殿が大切で御座います、外に方法はありません、大體譯がわからんのですから……自分の事ばかり考へてるのですから」

七月三十一日。

ウレデとイワン ルチクとは仲直りした。もう口論はしないが、各自、自分が正しいと思つて居る。フェヂヤに云はせるとイワン ルチクは「冗談」をいふ男である。食事の時イワン ルチクは云つた。

「中尉殿はつまり専門家ですな」

「僕が専門家？……何の専門家です？」

「婦人方面です」

「君はそれで何か云ふことがありますか？」

「グルーシエンカはどうです……あの薔薇色のコフトチカを着た……ストルプツイのジャン・ダ

ークはどうです……『俊馬を知つた』ミ詩人アレクサンドル ブーシユキン殿も云ふこりますよ、あなたは眼が高い」

ウレデは眼を皿に落した。可愛らしい男だ。私は彼がグルーシヤに惚れてるこゝを感じてゐる。けれども彼ははにかみやである。女に言ひ寄る術を知らない。彼女から見れば彼は旦那だ……

彼は實際、女をジャン・ダーク位に思つてるかも知れぬ。

フェヂヤは、茶を古い銀製の黒金の象眼した茶盆に載せて差出す。これは死んだカプリューガが或る『ソフホーズ』(國營商店)で買ったものだ。イワン ルチクはつゞける。

「君はアブリコーソフか、又はシウーかの上等の飴菓子でもグルーシヤに持つてゝやればいゝと思ひます、ブローカルの香水だつてかまやしないが……そしてグルーシヤは百姓女ぢやない、公爵の令嬢か、少くとも將軍のお嬢さん位に見たてるんですな……」

「アグラフェナ ステパーノウナ？」フェヂヤが一つの目をしばたく「さうだ、あの女に立派な身装をさせたら、どんな公爵令嬢だつて足許にも寄れやせん、第一等の美人になるがなあ……田舎娘ぢやない、花の蕾ですよ中尉殿」

「アグラフェナ ステパーノウナ……グルーシヤ……自分は彼女を愛してる譯ぢやない。けれども誰にも譲りはしないぞ。」

八月一日。

グルーシヤが夜半に忍んで来た。彼女は私に抱きつきながら囁やく。

「あなた、ほんとうに悪魔共をやつつけて下さつたのね、たゞ引きかへして來はせぬかゞ氣にかかるの……」

さうだ、引きかへすにきまつてる。そしてストルブツイを焼き拂つて、思ふさま振る舞ふだらう。「復讐者」は到る處を平定してゐる。ゾウホフシチナではもうキリギスが主人公になつてゐる。モジャーラでは支那人が銃殺してゐる。スイチエフカでは「チエーカー」が活動してゐる。どうしたものだらう？

「あなた、わたしを連れてつてね……」
「どこへ？」

「どこへでもいゝの……モスクワへ」

また莫斯科、また心配もない顔。また私の力に對する無條件の信頼。所が女の顔が少し曇つた。

「あの……貴婦人は……どこへ居なさるの？」

「モスクワに」

「モスクワに……」

グルーシヤは泣く。澤山の女の涙が流れた。私は淋しくなつた。私はいふ。

「グルーシヤ、ウレデは？」
「將校？ あの若い旦那？……人が居ないんぢやあるまいし、あの人達は蜜に集る蠅見たいに私にくつついてるわ。ながいこと御用を仰せつからぬ種馬のやうだわ……」

グルーシヤが全く私一人をまもつてる事を私はよく知つて居る。けれども私はどうする事が出來よう？ 明日はもうグルーシヤがないかも知れず、又私が居ないかも知らない……私はグルーシヤを接吻した。枯草の香がした。

八月二日。

イワン ルチクは工場の製品である。ロシアは彼の如き製品に毎日幾十となくスタンプを押して市場に出してゐる。けれどもそれは我々のスタンプではない。我々は監獄か又は『櫻の園』で大きくなつた。書物は我々のためには啓示であつた。我々はニーチェを知つた。けれども春蒔の穀物と秋蒔を識別する事は出来なかつた。國民を「救つた」けれども我々が標準とした國民といふのはモスクワの馬車屋であつた。革命を「遂行した」けれども血を見るさすぐに顔を背けてしまつた。我々は貴族出身の旦那であり、國民愛護者であつた。新しい人達が我々に代つた。彼等はひたすらに自分の事ばかり考へてゐる。

夜になつた。蠟燭が燃えてゐる。イワン ルチクは今夜はテントの中に寝て居る。彼は欠伸びながら云ふ。

「……農場を買ふんです、そして和蘭牛を飼ひ、亞麻を植え……金持の女と結婚しようと思つてます」

「それよりか、君が腸詰にならぬやうに(殺されぬやうに)用心したがよからう……」

御心配は無用です、私は彼等と一緒にやつて行く手加減を知つてます……何故、私が彼等を去つたかは非常に簡単です。私には人民委員会だつて、サウエートだつて、憲法會議だつて、或はそれが犬の陰莖だつて同じ事です……たゞ私は働き度い。貴族の目論見や、馬鹿共の社會主義化のためでなく自分のために働らき度いのです。所で共產社會でそれが出来得るでせうか？ 器械的に本を覺えたり、「インターナショナル」を唄つたり……それから「タワールシチ」に賄賂をやつたりするんぢや始まりません。百姓が勝つてはじめて秩序が出来ます。私には秩序が必要です。私は私有財産制を主張します、私有財産のある所には當然法律があります。」

「君に財産がありますか？」

「いえ、まだありません、が、いづれ資産を持ちます……左様なら、お休みなさい。」

彼は蠟燭を吹き消して、ゴロリと防水布で張つた壁の方へ寝返つてしまつた。彼には秩序が必要だ、そのために『徒黨』となつた。彼は私有財産の味方だ、そのために共產黨員だつた……所でロシアは？——『裝飾』だ……私は彼よりも不幸で貧乏だらうか？

八月三日。

私は畑の間の抜路ぬきみちを通つて行く。らい麥はまだ刈つてない。ケシの花が血の色に咲き、らい麥の琥珀色の穂の間々には、青い星形の矢車菊が隠見してゐる。眞晝中で苦蓬が甘く苦い様な臭を渡して居る。モジャール村で私は大道に折れた。道の側そばにかねて知つてゐる農場があり、『移住者』の商人で、私の古い親友イリヤカラブリヨフが住んで居る。こゝには畑も空、厩も空、そして廣々した屋敷内も綺麗に取片づけられて何一つない。たゞ池の中で家鴨かひてが周章ながら水をはねかへしてゐるのみだ。

籬の上に今年十歳になる小供が日焦で黒くなつた跣はだしの足をバタ／＼させながら乗つてゐる。

「今日は　ワローヂカ、お前はわしを見忘れたのかい？」

「通つて行け。」

通つて行け……私は子供好きだ。こゝにワローヂカを可愛がつて居た。私がやつて来るこ彼はいつも馳け出して出迎へた。そして自分達子供の事について例へば、硬鱈魚かたがしの事、杜鵑つぐみの巢の事、鼠の事、子を孕んだ牝馬フェクルシユの事など、熱心に話してきかせたものだ。ところが今日は

平日ひんじに似ず打沈うちしずんでゐる。彼は狼の子の如く、怒つた顔をして私を見た。

「お父さんは在宅おうちかい？」

彼は澁面しぶめんをつくつてだまつてしまった。

「お父さんはどうしたの？」

「お父ちゃん居ないよ……殺されちやつたよ、殺しに來たんだよ。」

「誰が殺した？」

「何をいつまでも立つてるの？　通つて行けつていつたのに……」

「母ちゃんは？」

紅い唇が顫えた。彼は日焦けのした、細い手を振つた。

「母ちゃんは？……母ちゃんは連れて行かれちやつた。」

「それぢやワローヂカ、お前一人になつたの？」

「僕ぼくもジユチカとのこつてる……小父さん通つて行けよいつてるぢやないか、聞き譯きやくが悪いなあ……　僕も殺されるかわからんよ。」

私は静かに陣營に歸つて行つた。

八月四日。

斥候に行つたイワン ルチクは、歸つて報告する。

「偵察しながらサロビヒン泉の邊に行くよ、町の民警が立つて居る。私は彼の側に歩み寄りまして。煙草を喫しながら、その男は自分は誰だとか、何處から来たか、何だかんだと話したんです。私は『共産黨員だ』といつて證明書を見せるよ、彼奴も『おれもさうだ』と大に安心しやがつて、『乃公は西伯利の戦線ここにオムスク方面で白軍の奴等をどれだけ殺したかわかりやしない。今度は緑軍の徒黨を生捕りにするんだ、彼奴等をチエーカーに連れてつたら、ひどい目にあはされるぞ』なんて大にメートルをあげるんです。散々しやべらせて『偉い、貴様は全く偉い』……云ひながら私は拳銃をひきぬいて彼奴の額に擬へてやりました。だが、どうしてもそれを信じない——『タワリシチ、冗談はよせ』……『何が冗談だ？……おい手をあげい！』……野郎はじめてわかつて、帽子をつきあげるばかり頭髪を退立てましたよ。これが彼奴の持つてた時計に黨

員證です。」

フエヂヤは時計を掌の上に載せて螺旋をまわした。それは金側で、時間々に時鐘が鳴る仕掛になつてゐる。フエヂヤは針の時鐘の上に置いては

「三、四、五、六……六時か。ハハア……巧妙なもんだな……ところでサモワルをたてにやなるまいて……時計の螺旋は捲いたら、かへしごかにやなるまい、イワン ルチクにサモワルを出さにや……いゝものが手に入りましたなあ、旗手殿、どうもおめでたう。」

八月五日。

「殺すな……またこの言葉を想ひ出す。誰がこんな事を云つたか？ 何故いたか？……何故、虚弱い人間に實行不可能な、力の及ばない戒律があるか？ 我々は『怨恨や猜忌で生きて居る。我々は穢れて、お互ひに憎み合つて居る。』けれども『内と外』について書いた本を開いたのは我我ではなかつたぢやないか。『來り見よ』と云つたのも我々ではなかつた……第一の馬は——白色で騎者は弓と冠を與えられて居た。次の馬は——赤毛で騎者は刀をもつて居た。第三の馬は——

灰色で騎者の名は死といった。第四の馬は——黒毛で騎者は手に權衡をもつて居た。そして私もきゝ、多くの人々も聞く『聖誠の主よ、何時まで地にすむ者を審判せず、且つこれに我済の血の様をなし給はざる乎？』

八月六日。

菩提樹の花が咲いた。地は蒼白く黄ろく、蕪高き花瓣に散り敷かれてゐる。林は葎や密の香に満ち、暑氣のために吐息してゐる。やつがしらは、別に急がうともせず松樹の皮を掻きまわり、ゆつくりした調子で唄つてゐる。雲の内には、目に見えない塵が聲高く鳴いて居る。

晝間は——不安なき生活、夜は——花。夜半には草が目に見えぬ程に揺れ、くるみ林の葉と葉がサラ／＼と音を立てる。何か悲しさうにビィ／＼いつてるのが聞える……まさに死なんとする人の聲は悲しい。また林の中で誰か残されてるな。

八月七日。

ウレデが私にいふ。

「ユリー ニコラエウイツチ、こんな苦ぢやなかつたんですが……」

「君、何の事を云つてるんだね？」

「我々の事です、緑派のこゝです……白派はやぐざもの、それでかまひません、だからこそ私は脱退したんです……所で私は、林の中はもつこいゝかと思つて居ました……」

「實際いゝぢやないか。」

「これでいゝんでせうか？……緑派の百姓共の無智はどうでせう？……『ジャケツ』、反基督教論者、イリヤ・ブローロク、薪……しかし、その實質は破壊ばかりぢやありませんか。」

「どうしたんだね、ウレデ、君はこの頃赤くなつたな？……」

彼は憤然とした。

「赤くなつたんですつて？……何であなたはさう云はれます？私は正直な生活がしたいのです、公然たる戦争がし度いのです。私は將校です。徒黨でもなければ強盗でもないのです……しかし、それはそれでいゝとしてですよ、我々が勝つたら百姓の勝利になりませう……そしたら後はどう

なりませう？ 百姓の天下になるでせうか？」

「さうだ、百姓の天下だね」

「それなら我々は？」

私は微笑した。

「ウレデ、君はどうなり度いんだ？」

彼は少し考へて後、靜かに口を切つた。

「私の希望は……モケイチが指を切られたり、ウオローヂカが一人ほつちになつたり、カブリキ
ーガが盗んだりする事がないやうにあり度いのです。それから『亞麻色の頭髮』や『毛むじやら』
の男や、軍事委員や、煽動者や、チエーカーなども絶滅させ度いのです……それから私は……」
私は彼を遮つた。

「君の望むのは地上の極樂た……」

林に入つてから、彼の顔が大分粗つぽくなつた。けれども、どこかにまだ娘のもつ柔かさを失
はない小供らしさが残つてゐる。彼は『悪』と妥協することが出来ない。即ち第四の馬——黒馬

——を知らないのだ……彼は思ひ惑ひながら私にたづねる。

「我々は何のために戦つてるのか、説明して下さい。」

私は答へた。

「ロシアのためだ。」

八月八日。

グルーシヤの父、ステパン エゴリツチが夜半に陣營に忍んで來た。頬髯は屑見たいに掻きむ
しられ、一つの目は腫れあがり、一の目から血が滴り、それが彼だみわと識別みわるこころさへ困難な様子
だつた。ジツと見てゐたフェヂヤは斯う云つた。「こいつあ、まあ非道いこころをしたもんだ、太鼓
でも叩くやうに顔をなぐりをつたな……本當に何といふ事だ？ 何といふ言語同斷な奴等だ？
全く人面獸身の罰當り者だ……ステパンエゴリツチは溜息を吐いた。

「オム、旦那様、かつばらふものは何でもかつばらひ、老人は皆思ふさま叩きのめされましただ
あ……『想出さんやうに、村は焼いちまふんだ、老耄共はくたばつてしまへ、それがお前達の運

命だ』つてな……そしてグルーシヤを連れて行かうとするんですが。グルーシヤの奴、斧ふりあげて——『殺してやる』……ちゆふて反抗うごひましたただあ、だかてもそんな事はな……縛られて、浚はれたでがすよ。オー、助け給へ、護り給へ……どうすればええか？……聖母マリヤ様、殉教者ワルワラ様……」

グルーシヤが捕まつた事がそれで判明つた。私は老人にたづねた。

「どこへ連れてしまつた？ ルジヨフへ？」

「えゝルジヨフへがすよ、旦那様、ズボータミスイチエフカを通つてルジヨフへ……」

鞍を着けるやうに私はフェヂヤに命じた。フェヂヤは三脚を束縛しばつた馬の許へ飛んで行つた。待つてゐる私はうすら寒かつた。私の手は慄へた。

八月九日。

私はウズモスチャ川の浅瀬を涉り、路も選ばずに一般にスイチエフスキー街道の方向へ驅けた。林道から谷へ、谷から麥の刈られた畑へ……枝は顔をひつかき、木の葉は耳の邊で音を立てた。馬

はすつかり汗をかいて幾度も鼻嵐を吹いた。——私はグループカを想出した。私は馬がへなくに疲れるまで鞭でたゞき、力まかせに拍車で横腹を踏んだ。スイチエフカが遠方から見えた時は、馬はもうヒヨロ／＼してゐた。しかし遅かつた。スイチエフカにはグルーシヤはもう居なかつた。

八月十日。

フェヂヤはルジヨフに行つた。そしてグルーシヤが『チエーカー』に坐つてる事を確めた。彼女は拷問されたが、さう／＼一語も發しなかつた。今、彼女を『プロブカ』責めミモスクワへの護送とが威嚇してゐる。私は『プロブカ』が何を意味するかを知つて居る。壁ミ、床ミ、天井ミを悉くコルクの板で張り詰めた中に人を入れる。空気がないので呼吸が出来ず、人は少しづつ理性を失ひ、力を失ひ、意志を失ふのだ……支那には鼠の拷問がある。生きた鼠を鍋に入れ、その鍋を腹に押しつける。鼠は出口を探して最初は腹の皮を噛み、次に内臓を犯し、脊を齧つて外へ出やうとするのである。人は鼠に齧られながら落命する……こんなのに比較するミ、薪の上で焼き殺す位の事は、子供の飯事だ。

私は眠るこゝが出来ない。蠶さなぎが盛に松林の中で鳴く。彼の干乾びたやうな熱い様な聲は私に安眠を與へてくれない。私の眼にはグルーシヤの高く白い胸が見える。枯草の香がする……エゴローフは野の草を刈つた。テントの側には夜露にシットリ濡れた枯草の山が出来てゐる。「神様、本當に死んでしまふのでせうか？」否、彼女は死なない、死ぬのは彼女を縛つた奴等だ、ならずもの共だ、悪魔共だ……ウレデは暗の中で私に呼びかけた。

「ユーリー ニコラエウイツチ、どなたさるのです？」

「どうつて何に？……ルジヨフを襲ふまでの事さ。」

「だつて我々は三十人足らずぢやありませんか」

「恐かつたら、君は林の中に残つてたらよからう」

彼はだまつてしまつた。私は何故彼を辱めたらう？ グルーシヤのためなら彼が眞先にルジヨフに行くこゝを私はよく知つてゐるのに。

八月十一日。

グルーシヤはもう居ない……夜になつても私は彼女の足音をきく……こゝは出来ない。朝が來ても彼女の微笑を見ないのだ……こゝは監獄でなくて砂漠だ。もう誰も私に「情郎……可愛い、方かたこいふものはない……もう誰も愉快な笑顔を見せてくれるものはない。誰も泣かない、周囲は咫尺も辨ぜぬ暗黒の夜だ——『百の目をもつた獣』——の如き闇は迫る。

八月十二日。

「オイ、フェヂヤ、お前はグジャチ川の橋梁を破壊せろ、ウレデ、君は東からモスクワ街道をルジヨフに行つてくれ給へ。僕は南方スイチエフカから這入つて行く。僕はチェーカーをやるから、君がたは郡執行委員會を頼むよ。集合は守備隊司令部の事。兵營は小さなものだ。赤軍はカルীগに向つて出發し、メシチヨフスキー方面で我々をさがしてゐる。イワン ルチクミエゴローフは僕と一緒に行くんだ。時は——夜半三時。

これが余の軍令だ。メイエル大佐なら、こりや軍令ぢやない出鱈目だこいふに違ひない。ウレデだつて勿論さう思つてゐるだらう。私は兵營は小さいと云つたが『小さい』は三百人を意味する。

そんな事はどうだつていゝ。グルーシヤが居ないぢやないか。敵の後を追へ、而して彼等に追ひ付き、剿滅せざる間は歸るなかれ」

八月十三日。

我々はルジヨフを取つた。夜が明けて、紅い太陽が出て、町の郊外クズネツにあるニコライ寺院の朝の禮拜式の鐘が鳴る時、ルジヨフを我々は占領した。モケイチ、チトフ、フウエドシチエニヤが戦死し、『徒黨』十二人負傷した。かくて市は我等の手中に落ちた。我々は——一時の支配者となつた。グルーシヤは何處に居るだらうか？

八月十四日。

グルーシヤは遂に居ない……私は彼女を『チエーカー』にも、郡監獄にも、兵營にも發見する事が出来なかつた。グルーシヤが居ないならば、何故余は我が『徒黨』を犠牲にしたか？ 何故ルジヨフを占領したか？

赤軍が進撃を開始し、モスクワから三箇師團出動しつゝあるミウレデが報告する。……三箇師團……よろしい、我々は出て行かう。よろしい、グルーシヤが居なくとも出て行かう。私はフエヂヤを呼ぶ。

「フエヂヤ、廣場には燈柱が何本立つてるか？」

「大佐殿、數へませんでした」

「數へろ、そして各燈柱に一人づゝ絞首せろ、わかつたか？」

「わかりました。畏りました。」

八月十五日。

『遁れ得られるものは遁れろ』と私は言ひ渡した。もう『徒黨』も『集團』もない。誰もない。あるのは各個人のみだ。即ち武装せざる人々のみだ。彼等は思ひ／＼に附近の林の中に散つた。赤軍は誰と戦ふのだらうか？

私は馬上ルジヨフを去る。何事を私は達し得たか？ かつて經驗した百年の疲勞が再び私を襲

ふた。否、今度のはもつこ悪い。後には——空虚になつた陣營あり、前には……前には如何なる希望が我を待つか？ 田舎はまだ燃えやまず、鞭は嘯き、機關銃はけたましく鳴つてゐる。同胞戦の終局はない。ロシアは涙と共に流れて滅び、偉大なる國民は消失するのだ。

夕闇が迫る。赤い天映もやがて消えた。透明な、蒼白い空に九つの燈柱が立ちならび、そこに九つの絞首された死體がぶら下つてゐる。皆、白くなつた眼を剝き、風にぶら／＼と揺れ動してゐる。

モスクワのため、ストルブツイのため、グルーシヤのためだ。

第三篇

二月三日。

私は電話口に行く。

「二七〇—〇三……」

「……」

「もし〜二七〇—〇三？ タワーリシチ、カワリヨフを呼んでくれませんか」

「……」

「あゝもし〜、お前はフエヂヤ？」

「さうであります、大佐殿」

「シート、用心せんさいかんど、もう乃公は大佐ぢやない。」

フエヂヤの笑つてる聲が聞える。

「大丈夫ですよ、彼奴等位、私は屁も思やしません……」

「どうだね？」

「例のはクンツエヲ驛の、第三引込線です。」

「さうか……時に、お前この頃どういふ都合だね？」

「私？ 一生懸命にやつてますから、聞もなくコムミサルになりませう……昨日は家宅捜査をやりました。白衛軍出身の怠業者を一人捕へましたが、奴さん逃げましたよ……」

私は受話器をかけた。よろしい、列車はクンオヲ驛にある。私にもやはり『怠業者』で『白衛軍』だ。今週中にはその汽車を爆破してやる。

二月四日。

フエヂヤは、モシエンキンぢやない、カワリヨフさいつて『全露國家保安部』に勤めて居る。エゴローフはラリオノフミ變名し保健省の番人に住み込んでゐる。ウレデはラゾーミなつて亦軍騎兵中隊長である。三人とも贋物の証明書、——『死んだ人の』——を持って居る。三人とも共産黨に籍を有し、特に『確實な黨員』だ。イワン ルチチは『投機師』、別に偽名を用ゐず、イワン ルチクで住み、委員會との連絡に當つてゐる。私は——名前なしに、種々の人の許に隠れてゐる。私を圍つてくれる人々は、勿論生命の危険を冒してゐるのだ。

私はモスクワに居る。不可能の事が、さうく可能になつた……私は自分について斯う云ふ事が出来る。私は日夜、深い海の中に逗留した。幾度か旅をした。幾度か凶漢のために危険に瀕した。市内でも砂漠でも危険に襲はれた。又勞役にも服し、疲労もした。祈禱もした。しばく精進もした。寒さにも遭つた。裸體にもなつた』

今、私は何處に居るか？再び『深い海中』に居るのではないか？

二月五日。

いかにしばく、悲しき別れに、

我が運命のさだめなさに、

モスクワ、我汝を想へるよ……

所が今は……私が嘗て愛してゐたモスクワを見出す事が出来ない。モスクワは、今すつかり他人がましくなつて仕舞つて居る。各廣場には——官製の『紀念碑』が立つて居る。看板に書いた文句は、ロシア人の耳に不快な侮辱を感じしめる。マルクスの紀念像、何事だマルクスなんか

を。……そしてその附近には『ナルコムズツラウ』(國民保)……『プロレットクリト』(無産階級藝術代表者の機關)……『ナルコムプロド』(食糧)……等が集まつてゐる。私はアルバツトを歩いた。冬の太陽がかがやき、足の下には雪がサク／＼と音をたてる。白揚や、白樺や、物思に沈んでる様な獨立家屋等は今も昔に變らず、モスクワは今もなほ大きな村落といふ印象を失はずに居るが、そこには自動車が発油の烟をあげ、耳を聳するやうな爆音と、不愉快極まる笛を鳴して疾驅し、車上には『この世の支配者』達が意氣揚々乗込み込んでゐるのだ。『下郎共が出世した』……私は顔を背けた。見たくないのだ、見るに忍びないのだ。

オリガはもとツウエトノイ並木路に住んで居た。私は廣い屋敷に這入つて、四階に上つて行つた。皮革の上皮を着た頬骨の突き出たタワーリシチが戸を明けてくれた——『そんな女は居ないよ——居らんよ——』……戸がピシヤンと閉つてから、ながい間、私はその戸の前に立つてゐた。暗くなつた。下方、『ドムコム』(家宅委員會)なる門番の部屋に、罵り合ふ高い聲が聞えてゐる。

二月六日。

私の居る部屋は、壁に壁紙も貼つてない。卓には汚れた卓布をかけ、その上にはよく磨いてない湯沸釜が置いてある。サモワルの向側にはエゴローフが腰かけて、お茶を飲んでゐる。エゴローフは百姓のするやうにお茶を皿に注ぎ、砂糖を齧りながら、飲む。茶器は勿論、自分のもので、今もなほポケットに入れて持ち歩いている。

「お前は『國民保健者』ではどうして飲んでる？ やはり自器でか！ 共産黨では『宗教は國民の阿片なり』なんて云つてるぢやないか？……」

「私は規定通りに飲みます……何處だつたか一人の悪魔が余計なさし出口をしたことがありません——『貴様はそれでも共産黨員か？ 何かいふ無自覺なプロレタリアだ？ 神なんてありやしねえ、ありや坊主共がえゝ加減に捏つちあげた代物ぢやねえか』つて……その時、私はちつと許り教えとききました。『共産社會は共産社會。神様は別ぢや。手前、神様のことをいざごさ云ふと承知せんぞ、手前の頭を撚り潰してやるからさう思へ』……どうもね大佐殿、私にや人に頭を下げたり、調子合せたりするここが出来ません。毎日、大變な罪過ばかり犯しまして……」

「罪過つて何だい、エゴローフ、どんな罪過だね？」

「どんな罪過かつて仰言るんですか。終日悪魔共と一緒に暮して、悪魔共の演説は聞くわ、御用はつこめてゐるわ、終には自分も悪魔になつてしまひさうです……。」

主婦のペラヂャ、ペトロウナが、私達の飲み乾したサモワルを取りに來た。彼女は瘠せて、困憊しきつて、綠色の顔をしてゐる。彼女の夫は技手で、工場に働らいてゐる——「工場ぢやありません、まるで帝政時代の流刑場です」——彼女が云つた。エゴローフは眉の下から、横目でじろりさ主婦を睨んだ。

「あの女もやはり悪魔ですか？」

「いゝや、仲間だよ……時にエゴローフ……」

「何です、大佐殿」

「クントオ驛の第三引込線に停つた列車にモスクワ兵營の彈藥がある。明日お前は休みだね、午飯の時間にあれを爆破して貰ひ度いのだが」

彼は長い鬚でうなづいた。「仕事に有りつけるといふ譯か、有難えや」さびき、それから几帳面に

「大佐殿、畏りました。」

二月七日。

クンツオチ。朝は厳しい寒さである。雪の反射で眼がはつきり開かない。右の方は公園で、一面に雪がかゝつて、むく毛を被つた様な三角形の縦が立つてゐる。「美術家」のフェヂヤがこれを見たら、きつこ「ビールの瓶」云ふだらう。左方は停車場で、こゝに幾本かの軌道が横はつてゐる。

一時に五分前。私は待つてゐる……するこ汽罐車から四番目の車輛に火花の閃めいたのが見えだ。ピカリミしたかと思ふこ、それはすぐに消えた。それから炎が烈しく噴き出し、轟々たる音響こ共に木片が飛び、列車の内から黒煙が龍巻を現して空にあがつた。黒煙が噴水の如く空高く打上げられるこ、それが火のやうな黄色な煙の輪になつてすべてを見下す恐ろしい眼のやうに林の上にかゝつた。

破片は嘯きながら飛んだ……私は立去らうこしなかつた。足が冷たい地に密着いた様で動かな

かつた。私は終末ハコボを待つた。最後の爆發を待つた。何故？ 知らない……私はそれを説明する事が出来ない。

二月八日。

私の部屋は屋敷の内に向いてゐる。窓からの眺望こいつては塵芥捨場と、庇から下つた氷柱ばかりだ。室内は眞晝中でさへ薄暗く嚴寒にもかゝわらず何こも云へない悪臭が漂てゐる。これでもモスクワか？

林の中に居た時分とか行軍の時などに遠方から仰ぎ見たモスクワは道案内の星の如く輝いてゐたものだ。所がどうだ。乃公は今そのモスクワに居るが、お祭の如く心のこきめく何ものもない。すべて平々凡々だ。朝のサモワルも平日の通りで、灰色のペラダヤ、ペトロウナにも何の變哲もなく、ブレナチスランカもアルバツトも平凡だ。「自己偽瞞」なくて生くるのは苦しい事だ。闘ふのは尙ほ苦しい。グルーシヤは生くるために闘つた。私は何のために闘つてゐるだらう？

私は「プログラム」を信せず、勿論「首領」を信じない。私も同じく生くるために、地上に生き

る権利のために闘つてゐる。獸の如く爪や牙や血を以て闘つてゐる……私は『地上に』と書いた、が、さうぢやない、地上にはない、ロシアに於いてだ。たゞロシアでだ。お祭気分がなくなつたつて、窓の前に塵芥捨場があつたつて、薄暗くつたつてかまやしない。それがどうあらうと、これは我がものだ、我が生みのロシアのものだ。わがオリガと同じく。

二月九日。

我々はストラストヌイ並木路に腰を下して居る。黄昏。小路を風が渡つてゐる。家々には灯が點きはじめてゐる。フェヂャは唾液を吐いた。

「大佐殿、私は『タワリシチ』を殺してやりました。」

「何だつて？ フェヂャ……モスクワでか？」

「さうであります、モスクワです。私の長官です、ソーボリといふ野郎です。」

「何時だ？」

「昨日の夜半の事です。私は奴がヂエウイチイ・ポーレに住んでる事を知つたんです、強盗見たい

に門の所に待つてたんです。皆寝静まつて、街上に球をころがしてもいゝ位、誰も通るものがないりませんでした。そこへ悪黨の野郎がチヨコ〜小刻の足どりで歸つて來たんです。私は出て行つて、いきなり奴の帽子をひつたくつて、拳銃で後頭部をどやしつけてやりました。野郎は地面に坐つてしまひました。私はまづ奴の外套をぬぎにかゝつたんです。すると奴は目を見張つて、低い聲で『カワリヨフ……タワリヨフ……』といふのです。私の事をいつてんです。言ふまでもなく私は奴をたゝんでやりました。」

「そして掠奪もしたかい？」

「大佐殿の御見當ではあの際、私はそれをすてゝ立去る男でありませうか？……所で、朝になつて、ナエーカーは大變な騒ぎでした。『タワリシチ、ソーボリが殺された……犯人はどうも強盗らしい』私は云ふてやりました「タワリシチ、もしかしたら白衛軍かも知れんよ」滅相もない、白衛軍なんていつてやつたもんですから、皆、いやな顔してましたつけ、それに例の爆發でせう……チエーカーでは心配してゐるんですよ、出て來やうと思ひますが中々出してくれませんでした。私が犯人を捕へる役目を仰付かつたりしたもんですから、やつと今出られた譯なんです。」

彼は微笑した。彼はこゝでも『アフリカの一六勝負をやつてゐる。勿論負けるやうな男ではない。ほんまうに屈托のない性質だ。』

二月十日。

今日は私の誕生日である。私はすっかり忘れてゐたが、フェヂヤが想出して、お祝に『繪』を持って来てくれた。その『繪』には薔薇色のリボンをつけた花束が描いてあつた。そしてそのリボンには『小さな詩』が書いてある。

徒黨達はあなたを祝福し

あなたの幸福を祈ります

崇頼漢や悪魔の震懼する

我等の卓越せる父へ！

そして『詩』の下に、丁寧な字體でオリガの住所が書いてある。モルチャーノフスキー小路、第十號とある。フェヂヤはこのアドンスを『全露國家保部』で知つたのだ……オリガの在所がさうく

わかつた。私は幸福だ。

「有りがたうフェヂヤ……所で乃公はどうして『父』で、それに『卓越せる』なんて肩書までつくるのかね？」

「卓越したる名聲はポプルスクミルジョフで著されました、父に申しますのは……」

「彼は『買った』絹のハンカチで鼻汁を擽んで、片眼をしばたゝきながらいふ。

「父に申しますのは……我々をよく勞はつて下さつたからです……」

二月十一日。

オリガは、あつと驚きながら後に退つた。自分も掛けず、私にもかけるこ云はずに立つたまふだ。『ジョルジ——あなたは徒黨？』

私は彼女を凝視した。黒い衣服で全身を包んでゐる。細りした指には指輪も挿してゐない。そして斷髪だ。彼女には私にしつくりこ來ない何ものかある。或は……或は尼になつてるのか？……しかし、そんな筈はないが。

「お前は今、何だね？」
女はきつぱりこ答へた。

「わたし？——わたしは共産黨員よ」

私は腰を下した。その時、私ははじめて室内に何も無い事に気がついた。卓と寢臺と二つの椅子と壁にマルクスの肖像がかゝつてゐるだけだ。

「あなた——徒黨？」

「さうだ、僕は『徒黨』だ」

「白衛軍？」

「白衛軍」

「アンタントの傭人？」

何故オリガはこんな官製の、教はつた文句ばかり繰り返へすのだらう？……私はひやゝかに云つた。

「オリガ、僕は買はれたりなんかしないぞ」

「だつたら、なぜ？……なぜそんな事してるの？」

彼女は理由がわからんこいふ様子だ。諒解しようこつとめてゐるがわからないらしい……自分も同様だ。

二月十二日。

オリガはいら／＼しながらいふ。

「ジョルジ……あなたは革命のために戦つたんぢやない？ 本當のこゝをいふてね、革命を仕遂げたのはあなた達？ あなた達ぢやなくて私達ぢやない？ 自由のロシアにしたのは私達ぢやない？……」

「オリガ、自由のこゝは云ふなよ」

「ロシアを復興させたのは私達ぢやない？」

「ロシアのこゝは云ふな」

「なぜ？」

「自由、なけりやロシアもないぢやないか」

「自由がないつて？……だつて、あなた達はどうか？ 絞首しない？ 銃殺しない？ 焼殺さない？……ロシアはないつて？……だつたら何故あなた達はロシアのこゝで外國人の許に運動になんか行くの？」

「オリガ、だまれ」

彼女は立ちあがつた。眼が險しくなつた。彼女は手で卓を叩いて云ふ。

「國民の涙や血を何と思ふの？ 正義をどう思ふの？ あなた達が故國を愛するのはたゞ自分達のためぢやない？ あなた達は自分達に都合のいゝ自由ばかり尊重するんぢやないの？……いゝえ……あなた達は革命を賣つたつたんです……ロシアを賣つたんです……あなた達は敵です……ジョウジお聞き、あなたはね、わたしの敵よ……」

私も立つた。

「それぢや、オリガ……乃公を報告したらよからう。」

「何？ 何を言つてるの、ジョルジ？」

彼女は顔を掩ふて泣き出した。これは一體誰だ？……オリガか？……乃公は何處に居る？ 僧房にか？ 林中の修道院にか？ そしたらこの金縁に納れた尊像は何のためだ？……オリガは涙に咽びながら云つてゐる。

「ジョルジ……ジョルジ……あなたは何故來たの……」

二月十三日。

何故私は來た？……イエスを試みんざした悪魔は、世界の諸國にその榮華を見せ「これ等は悉、我の支配する所なり、爾も俯伏して我を拜せば此等を悉なんぢに與ふべし」云つたが、それは殆んど眞實であつた。悪魔はその力を有してゐた。悪魔は石をパンにするこゝも出來た、足の石に觸れぬやうに身を下に投げるこゝも出來た。所で「殆んど」——すべては誘惑である。何が眞理であるか？ 我々はこれを知らない。彼等も知るまい。がある時期が経過したら絞首臺や、銃殺者や、フエヂヤや「チエーカー」がなくなつて「幸福」な状態が來るであらう。

井戸は穿たれない。目は暗に眊された。オリガも獨りよがりのマルクス肖像に誘惑され、試

みんなするもの、説教に迷はされ、狂暴なる怒りなつてゐる。夕暮れた。部屋の内は空虚である。壁の向にはこの家の主人が甎をかいてゐる。私は寒い。私は灯も点けないでゐる。

二月十四日。

フェヂヤが息を切らして飛んで来た。顔色は蒼ざめ、その亚麻色の頭髮は亂れてゐる。私はこれまで彼のこんな取亂した姿をたつた一度見た事がある。夜襲の時だ。

「大佐殿、やつこ馳けつきました……御用意下さい。この家はすつかり包圍されてます」

私は信じなかつた。「チエーカー」が私の住所を知る筈はないのであつた。こゝは仲間だけにしか知らせてない、仲間には裏切者なんかかない筈だ。

「フェヂヤ、下らんこきを云ふな。」

「では窓を御覽下さい。」

見るさ屋敷内に番兵が立つてゐる。これは何事だらう？ 途徹もない事だ……フェヂヤは拳銃を掴み出した。私は彼の手のふるへてるのを見た。

どうしたものだらう？ もう我々は囊の鼠だ……私も同じくブラウニングを取り出していつでも撃てる準備をした。

「フェヂヤ、お前は黨員證を持つてるね？」

「さうであります。」

「チエーカーの證明書もあるだらう？」

「さうであります。」

「だつたら、よろしい僕の先に行け。」

彼は私の言つた意味を諒解し、晴々しい顔になつた。我々は食堂を抜けて臺所へ通つて行つた。食堂では子供達が大さわぎしてゐた。ペラゲーヤ、ベトロウナは私に囁いた。「お行なさるな、殺されますよ……フェヂヤはさつさと門の方へ出て行つた。」

もう街路だ。街上には貨物自動車が停まつてゐる。貨物自動車が息氣をはづませる度に窓のガラスがビリ／＼震へてゐる。軒からは雪解けの水が滴り落ちてゐる。基督救世主寺院が太陽に輝いてゐる。フェヂヤは十字を切つた。

「大佐殿、神様がお助け下さいました……聖母様は我々の町プスコフを沈ませ給ひませんでした
 (プスコフの古き傳説よりとりて、不幸の去れ)……」
 (るをいふ。フェヂヤはプスコフの生れである)……」

二月十五日。

私は古い知り合なる某教授の許に圍つて貰つてゐる。教授は生物學、動物學、礦物學等を學校で講義してゐる——私は教授がその他にまだどんなものを講義してゐるか知らない。彼は朝から勤務に出て行き、私は單身家にとつてゐる。

家ではない、石造の箱だ。住宅ではない、科學の博物館だ。こゝには顯微鏡、蒸溜機、化學用曲頸瓶、その他種々の瓶、さまざまの着色された表がある。石の壁の上には杜鵑の如き聲を出す時計がかゝつてゐる。この時計は、半時間毎にクークといふ音を出すのだ。時は急がうともせず、旬つてゐるが、無爲の日は暮れて行く。

私は嘗て云つた事がある。「余は奴隷でありたくない。よしや自由なる奴隷であつてもいやだ。余の全生涯は戦ひである」。私は「純粹なる葡萄酒を飲み」(自己の欲する)そしてそれを今も續け

てゐる。「殺すな」……汝の妻を殺してゐるのに「殺すな」といふか？ 汝の子供達を殺してゐるのに「殺すな」といふか？ 「殺すな」といふのは、その小膽を證據立て、弱さを上品に潤飾し、そして無力に美徳なる名を附せんとするものだ……「人を殺したる者は瘡のために死ぬる」が「臆病者、裏切者及び下等なる者は沸騰せる火の池に投ぜらるべき運命を持つてゐるのだ」

二月十六日。

私の繫留状態は長くつゞくだらうか？ フェヂヤは大變心配して、私が戸外へ出ない様に勤めてゐる。私は一人で時計と睨めつこだ。静かだ。まるで冬深い日に部屋の内にもつてゐる様に静かだ。

目は暗に睨された……あれが果して前のオリガだらうか？ 下げ髪はどこにある？ 白い服装はどこにある？ 喜に満ちた笑はどこにある？ サコーリニツク(モスクワ市外の森林公園)はどこにある？ どこへ返らぬ日は去つた？ 蠱惑の力は全く恐ろしい。無學なるエゴローフは自分の心でその蠱惑をよく感ずるが、フェヂヤも、ウレデも、(勿論イワン ルキチもこれを感じない。彼等のため

にはすべて明瞭で簡単だ。ロシア共『國際共産黨』。百姓共労働者。彼等は百姓共ロシア共の味方だ。私共しても同じこと、百姓とロシア共の味方である。けれども、百姓の味方たる自分に對して百姓達が如何なる返答を與へたかはよく記憶してゐる。さうしてオリガは？……

二月十七日。

ありがたい、私の監視も大分緩になつたらしい。フェヂヤが電話で知らせる所によれば「チエーカー」では、私がモスクワを出發したといふ報告を受け取つたので、今、私をキーエフやオデッサで探してるとの事だ。毎晩イワン ルキチがやつて来る。彼はデブ／＼肥つて、綺麗に髯を剃つて、背中の縮つた流行服を着て、金鎖を胸に絡ましてゐる。それには『音を發する』時計がぶら下つてゐるだらう？ 彼は委員會の名を以つていふ。

「委員會は爆破に不満です。」

「なぜ？」

「あゝいふ事をしちや仕事の邪魔になるつていふのです」

彼のいふのにも理由がある。が、我々は血に中毒してゐる。血を見ないと闘つてゐるやうな氣がしないのだ。『委員會の連中』は鼠の如く靜かに、根氣強く、そして用心深く勞農政府を齧つてゐる。彼等の生活は我々のよりもつと苦しい。彼等は交代のない勤勞をつゞけ、あまり成績の目に見えない凡帳面の勞作に當つてゐる。勤勞にはじまつて、勿論監獄に終るのだ。或は『腸詰』(慘殺)か、『コルク責め』かも知れぬ。

「委員會は他の註文をして居ます。」

「何だね？」

「『全露チエーカー』長を所望してゐるのです」

『全露チエーカー』長……私も流石に躊躇した。彼はまるで皇帝の如く——七つのスタンプと七つの鍵のかけに居る。が、委員會がさう思つてゐるならやらにやなるまい。

「よろしい。」

「ぢや私からさう申します。」

「さう云つてくれ給へ、ところで君は？ 此の頃どうだねー」

イワン ルキチは一ぱい膨れた財布を出して見せた。その内には弗や磅が這入てゐた。
 「御覽なさい、煙草を賣りましたよ。」
 彼は商買をしてゐる。彼は『投機師』だ。『蟻は各々自分の藁莖を運ぶ』……さうだ、きつと彼は農場を買ふだらう。そして和蘭牛を牧養するだらう。共産黨員達も『自分の懐のこと許り考へてゐる』ぢやないか。

二月十八日。

私はウレデとフエヂヤとを自分の許に呼び寄せた。ウレデは『共産黨幹部』になりすましてゐる。軍刀を輝かし拍車を威勢よく鳴らしてゐるが、たゞ足りないのは肩章だ。

「どうだ、ウレデ、肩章を外したな？」

彼は顔を赤くした。

「しかし、それも残念には思ひません。本當を云ひますと、我々は何も知りませんでした。赤軍だとして決して乞食の群ぢやありません。これは軍隊です。どうして立派な軍隊です……赤軍でも

かまひません、とにかくロシアの軍隊です。」

フエヂヤは冷笑的に混ぜつかへした。

「全くですよ、中尉殿。悪いこともしないのに、顔をビシ／＼擲りつけた上に『貴様何と思ふとるんでい、臨時政府(ケレンスキ)の政府)』ぢやねえぞ、帝政時代ぢやねえぞ、何をボンヤリ立つてくさる、この阿呆奴！』……なんて叱られるでせう、嘘言ぢやありません。」

ウレデは怒つた。

「それは嘘だ。」

嘘だ？……蠱惑する力はそのにある。ウレデはまた將校の氣もちになつてゐる。彼は馬に跨つて騎兵中隊の前面に立つてると、自分が白である事も殆んど忘れるのだ。私はなにか相談的に云つた。

「君は『全露國保安部』長のことをどう思ふ？」

ウレデは何の躊躇もなく即坐に答へた。

「ユーリーニコラエウイッチ、承知しました。私はいつでもやります。」

「フエヂヤ、お前はどうか？」

フエヂヤは黙つてゐたが、考へ深さうに頭をふつた。

「命令ならばやらねばなりません。が非常に困難な事です。大佐殿、蝟を捕へるのは容易ぢやありません。」

二月十九日。

さうだ、何故私は來たらう？……自由の生活や林の中の生活を懐しむ憂鬱が再び私の心を齧り始める。モスクワでは石の間に搾られる様で窮屈此上もない。私は今更らオリガの事を思ふ氣にもなれない。彼女は理由がわからないといふ風をした。彼女には理解する力がないのだ。だが私も『自分も同様だ』……と云つだぢやないか。

昨日、私はエゴロフと一緒にイリーノカを歩いた。競商館に近きクレムリン城壁の側にほろほろの部屋敷を着た韃靼人が立つて帽子を差出してゐた。帽子の隅には『タワーリシチ、棺の代價を惠んで下さい』と書いたものを貼りつけてあつた。エゴロフは立ちとまつて、帽子の内

汚れた紙幣を見てゐたが、ペーッとそれに唾液を吐きかけた。

「可愛想だつて……何も不憫に思ふことなんかあるもんか？ やがてくたばらうとしてゐながら、まだ悪魔共に愛想をつかさなないばかりか、タワーリシチなんて呼んでゐる。そんな心がけだから、神様の怒に觸れたんだ。」

向ふ側(共産黨)は『悪魔』。よろしい、然らば當方は一體何か？ まさかエゴロフが新生活も建設すまいぢやないか？ まさかフエヂヤが健全なる種子も蒔くまいぢやないか？ まさかウレデで暴動なんかした事のない旦那でもあるまいぢやないか？ イワン ルキチの如き取る事の外に何か考へる男だとも思へないぢやないか？ 我々は何をロシアのために齎らさうとするのか？ まさか……けれども『神様の怒に觸れた』のは我々ぢやない。それは戦はざるもの、及び死なうとしながらもなほ『悪魔』の慈悲に縋らうとする者等ではないか。所でオリガは？……

二月二十日。

私はオリガに云ふ。

「掠奪したものは掠奪していいか？」

「あなたは掠奪しない？」

「罪もない人を殺していいか？」

「あなたは殺さない？」

「祈禱をしたといふ理由で銃殺していいか？」

「あなたは神を信ずる？」

「ユグの様にロシアを賣つていいか？」

「あなたは賣らない？」

「よろしい。僕も掠奪をしたり、殺人をしたり、神を信じなかつたり、祖國を賣つたりするといふなら、勝手にさう云はせておかう。そこでお前にたづねるが、一體そんな事をしていいか？」

彼女は強く云ひ放つた。

「いゝわ。」

「それはどういふ名でか？」

「兄弟、平等、自由……それと新らしい世界の名で。」

私は笑つた。

「兄弟、平等及び自由……といふ言葉は警察署に書いてある。お前はそれを信ずるか？」

「さう。」

「ブーシユキンと、白露の百姓とを平等だと思ふのか？」

「さう。」

「スメルヂヤコフとカラマーゾフとが兄弟の如く仲よく暮せると思ふのか？」

「さう。」

「お前達の共産黨に自由があるか？」

「さう。」

「それからお前は、お前達が世界を改造してると思つてるのか？」

「さう。」

「それには如何なる代價を支拂ふつもりか？」

「いくらかゝつたつてかまやしなう」……

* * * * *

彼女は他人である。私は彼女と同席するのは監獄に居る様に息詰る心地がする。

二月二十一日。

「眞理を理解するためには、書物の十冊も読めばいゝんだな？」

「それも書物によるのよ。」

「聖書はどうだ？」

「聖書なんて小供の讀む本ぢやないの。」

「家畜のやうな群を味方につけるためには、露臺から『斬れ』と吐鳴ればいゝんだね？」(レーニンがはじめてロシアに歸つた時、彼は露臺から演説した)

「家畜のやうな群ぢやない、ロシアの國民よ。」

「神を信する國民か？」

「自由の國民よ」

「故國や生れ故郷やを否認するためにはマルクスとかいふ男を信すればいゝんだね？」

「ジョルジ、わたしをいぢめるつもりなのね……」

「そしてロシア語を破壊し、父祖の信仰に反對し、國民を零落させ、妊婦を銃殺するのだ。」

「ジョルジ……」

「ロシアの名を貶し、風來坊達の懷を肥やすために仕へるのだ。」

「ジョルジ……」

「オリガ、お前は『爾もし俯伏して我を拜せば此等を悉みななんぢに與ふべし』……といふのを記憶してゐるだらう。お前は俯伏して拜めよ、いや、もう拜んだんだ。最早お前のものだ。お前達のものだ。お前やお前達に力は與へられてゐる。

オリガは胸を卓に押しつけて泣いた。噉り泣きした。フェヂヤが私を待つてゐるので、私は出て行つた。

二月二十二日。

フェヂヤが報告していふ。

「大佐殿、あなたを殺しましたよ、眞實に、あなたはお死亡になりました。昨日チエーカーに達した報告によりますよ、何でもあなたがオデツサからモスクワに歸られたんだつていふ事でした。所が今朝の情報では、八時頃自働車でベトロフ公園にやつて來られるといふのです。チエーカーでは大騒動でした、すぐに一箇中隊ツヨルスカヤ關門へ派遣したんです。罪造りの私もそこに居りました。所が、ほんごうに自働車の駆けて來る音がきこえました。……「止め！……車を出ろ！……證明書を出せ！……」こいふ譯です。一人の紳士が自働車を下りました。「私はアレクシユクさいふもので、國立銀行に勤めて居る」といふ。「國立銀行に勤めるアレクシユク？……わかつてる、一緒に來い！……」可愛想に奴さん、そつち引つばられ、こつち引つばられてる間に眞蒼になつちまひまして、「番兵！」なんて叫喚いて、灌木の中へ四五歩逃げ出しました。ボン／＼と一齊に銃口を切つたからたまりません、私が屈みかゝつてみた時はもう息がありませんでした。その時、私達の上役は「犬が犬らしく死んだ」と申しました。これは即ちあなたの事ですよ、かう

してあなたを殺したんです。」

「フェヂヤ、その報告はお前が書いたんだな？」

「何を仰言います。そんな事はありません。私にそんなこゝが出来るもんですか？」

私はフェヂヤが嘘言をいつてるのを知つてゐる。彼はまた「アクリカ」をやつて、勝つたのだ。「やはり運がえよよ。」

二月二十三日。

ウレデが逮捕された。彼は教練後に調馬場で捕まり、貨物自働車で「ウエー、チエー、カー」に連れて行かれた。彼は反抗しなかつた。フェヂヤは私に家から出るなこいふ。私はこの繋留にはもうあき／＼だ。オリガはどうしてるだらう……オリガは他人だ。しかし彼女は近親者だから他人ぢやないか。ウレデは近親者であつた——勿論、近親者であると共に他人でもあつた。すべて我々の間には、誠實の部分があるのだ。少しいである。小さな部分である。誰かすべて誠實を認識するこいひ得るものがあるだらうか？

二月二十四日。

『ウエー、チエー、カー』の長官を殺すことは果して不可能だらうか？ フェヂャはウレデが偶然に逮捕されたことを極言してゐる。私を包圍したのも偶然だつた……『革命の歩みを保持せよ、我等の敵に油断はないぞ』我々に油断はない。勿論、彼等にはない。狼は三十露里彼方の人を感じる。彼等も左様に我々を感じ、我々も同じく彼等を感じるのだ。私は危険を感じる。危険が身邊に迫つてゐるのをさきつてゐる。エゴーロフは陰氣になつた。彼はシニツインを想出して、モスクワに薪のないのを残念がつてゐる。——『一體誰を焼くんだいエゴーロフ？……誰を？ お前は自分で知つてゐるぢやないか……』しかし私は知らぬ。フェヂャでもなければ、イワン ルキチでもあるまいから。

二月二十五日。

ウレデは、今日ルビヤンカの地下室で銃殺された。死ぬる前に彼は私に手紙を書いた。それをフェヂャが持つて來た。『私は間もなく死ぬることを知つて居ます。けれども生命を惜しいとは思

ひません。私の良心は純です。私は自分の役目を果しました。私は自分のなし得ることをなしてロシアに仕へました。私のしたことは少なかつたかも知れませんが、けれども他のものが多くをすればいいのです。私はロシアを信じます。ロシアの繁榮、自由と、偉大さを信じます。またロシアの國民を信じます。そしてロシアの國民のために死にます』ウレデは幸福だ。彼は心に確固たる信仰を、公明なる自覺をもつて死んだ。何といふいふ死だ。最後に、死に直面して自らの良心を顧み、『主よ、私は自分の役目を果しました』と彼は祈禱した。彼は自分の生命を『その友』のために捧げた……ナザレンコもかうして死んだ。

二月二十六日。

……かくて力強き歩みでゆく——

うしろには——餓えた犬、

まへに行くは——血の如き旗、

吹雪のために見えず

銃丸にも害はれず

温雅なる足並もて、

眞珠の如き雪の吹き寄せを

眞白き薔薇の冠かざして――

まへに行くは――イエス・キリスト。

「ジョルジ、あなたはこの詩を記憶してるの？」

「うむ、記憶してる。だつてお前の意見ぢやキリストは小供のためのものぢやないか……」

「えゝさうですとも。ねえジョルジ、わたし達は、はじめはアレスト・リトスクで屈辱的の講和をしたんだけどお終にはロシアを防禦つたんです、あなた達は最初は進撃したけれども最後には他人のパンで生きるこゝになつたんぢやないの、さうでせう？」

「うむ、さうだ。」

「それからね、わたし達は最初は戦線で敵と交戦したがおしまひには到る處で勝つた。所があなた達は義勇兵から出發してレムノス島(南露軍の撤退したギリシヤの島)で終を告げたんぢやないの、さうだぜ

う？」

「うむ、さうだ。」

「そしてね、わたし達は機關銃を出發點としたが、歸着する所は自由でした。あなた達ははじめは自由だつたが、最後の落ちは漫畫の王様だわ、さうぢやないの？」

「さうしたけりや、さうしておけ……」

「だつたら、なぜあなたはわたし達に反對なの？」

オリガは、例の、少しのかざりもない黒の服装で、蒼ざめた厳格な顔をして坐つてゐる。私は彼女に眼を放つて昔のオリガの面影をさがした。私の愛した空色の眼がそこにある。けれども、それさへ何だか違ふ様だ。その昔の魅力はどうなつたらう？……私の心をひきつける何ものもないのだ。私は靜かにいふ。

「僕は、お前がなぜ僕等と一緒でないかといひ度いのだ。お前達は遠の昔から自分自身を否認してゐるぢやないか。お前達の『共産黨宣言』はどうなつた？……お前達は『農家には平和、宮殿とは戦ひ』と約束しておきながら農家を焼き拂ひ、宮殿の内で酔つぱらつてゐるぢやないか？ お前

達は四海兄弟を約束したが、或ものは「棺代」の施しを乞ひ、或ものはそれを與へてるぢやないか？ お前達は平等を約束したが、或ものは王様達の前に膝を屈し、或ものは彼等の打擲を忍んでゐる。お前達は自由を約束した。ところが或ものは命令し、或ものは奴隷の如く服従してゐるのぢやないか？ 昔と違ふ事が何かあるか、皆、帝政時代と同じぢやないか、共産社會なんて何もありません……偽瞞ミ仰山な文句ミ盗みミに満ちてるぢやないか？ どうだ、まちがいか、云つて御覽、オリガ？」

彼女はだまつてゐる。返事が出来ないのだ。

「どうだ。え、オリガ？」

「え、それはほんとうです。」

二月二十七日。

果してオリガを説伏する事が出来るだらうか？ 若しもそれが出来たとして、何の役に立つだらうか？ 彼女は泣いた。がそれは自分が誤つてゐるのを泣いたのでもなければ私の事を泣い

たのでもない。……我々の戀を泣いてるのだ……我々二人は霧の中を彷徨ふてゐる様なものだ。我々の間にはフェヂヤの無邪氣もなければエゴローフの火の如き熱もなく、ウレデの純潔もない。私は我々に過のあることを知つてゐる。色々の事情があるにしても、とにかく過があつた。否、或は過ではないかも知れぬ、誰も過のないものはないし、又、誰も正しいと云へるかも知れない。皆『地上の塵』であり『絨毛』である……手に權衡を持つた騎士は何處に居るか？

二月二十八日。

我々は話すべきことは、みんな話したが、しかしもう何もいふ事はないだらうか？

「ジョルジ……」

「なに、オリガ？」

「あなた、私を憎んでらつしやる？」

「いゝや」

「だつて私を愛してないぢやないの？……きつミ誰か他の女を愛してゐるのね？」

外の女を？……私はふみストルプツイを想出した。月光と白い頭包を想出した。私はまた、星
 こ、林こ、清鮮なる牧草の香を想出した。「百姓女の私を可愛がつても、奥さんには貴婦人を貴
 ふのね」こいふ聲が耳もこに聞える様だ。私はグルーシヤを愛したか？ 知らない。その當時は
 愛してゐる様に思はなかつた。

「何故返事しないの？」

女は穿鑿するやうな眼で私を見ながら云つた。

「あなたは他の女を愛してゐるでせう……それなのに何故来たの？ なぜわたしを苦しめるの？」

わたしを冷笑かすつもりなのね……わたしあなたの敵ぢやないの、あなたはわたしを憎んでるぢ
 やないの、お歸りよ、ジョルジ、出ておいで……」

「よろしい、僕は出て行かう。」

私がさういふと、オリガは驚ろいた。そして靜かに立ちあがつて窓の許に歩み寄つた。窓の灰
 色の框の中に高く黒い影が立つてゐる。その影の主のために私はこゝへ來てゐるのだ。

「ジョージ、お歸りつてば。」

三月一日。

イワン ルキチは『委員會』の用で南方に旅行した。恐らく彼は『チエーカー』を恐れたんだ
 らう。そしてまたバンでも商ふんだらう。パン、煙草、カカオ、葡萄酒——彼はどんな品物でも
 えり好みなんかしない。彼は『農場』を買ふ金を貯めてゐるのだ。

エゴローフは憤慨していふ『仕事を放擲つてにげ出しやがつた……それも皆金儲けのためばか
 りだ。我々の仕事で金儲けなんかしていゝものか？ この仕事に従事するのは、例へば中尉殿の
 如く、たゞシャツ一枚でなくちやいけねえ。あゝ呪はれた悪魔共が、金で誘惑して、國民を墮落
 させる……』彼は裏屋敷の小さな部屋に住んでゐる。部屋の右の隅にはサワオフの神と、キリスト救
 世主の聖像をかけ、左の隅には鐵の籠のはまつた高い匣が置かれ、その中にはブラウニングと、
 彈丸こ、爆彈こ、手榴彈等が這入つてゐる。屋根裏には『人の一生』こいふ俗悪な繪草紙が貼ら
 れてゐる。即ち上へ昇つて少年時代、青年時代、結婚……下へ降るのが結婚、老境、墓。墓の下は
 地獄で、三又鎗と尾こをもつた鬼と『永劫の火』こが描いてゐる。エゴローフは指の先でそれを

指していふ。

「人はこれを忘れてるんであります。」

私はいつた。

「お前も出発つたらどうだ」

「大佐殿、私はたちません。」

「うっかりしてるご逮捕されるぞ。」

「逮捕なんかされません……私はこの匣で彼奴等を爆殺してやります。」

私は微笑した。

「そいつは罪ぢやないか？」

「罪だつて仰言るのですか？……悪魔を滅ぼすのが罪でありますか？大佐殿、そんな事、どこでお聞きになりました？」

三月二日。

フエヂヤは私を電話口と呼んで、チエーカーで私達を探してる事を知らせて来た。私はフエヂヤにもモスクワを發足するやうに勧めた。彼は勿論、發たうとは云はなかつた。大佐殿、私はあなたと生死を共にし度いと決して居ます。私は、我々が火を弄るやうな危険を冒してのをよく知つてゐるが、しかしこれを放擲するのはいやであり、また出来ない事だ。私はフエヂヤが「ウエー、チエー、カー」長の住所を突きこめるであらうといふ望を失はずに居る。「ウエー、ヂエー、カー」……何といふいやな名稱だ……何故「オフランカ」(帝政時代の特別警察)といはないのだ。帝政時代の拷問所と同じであり、シエミヤキンの裁判と同じではないか。

私はモスクワを歩いた。粉雪が飛んで、並木路や、廣場や、小路をつゝみ、波打つてゐる空気を白くした。スパスカヤ塔の時計が鳴つた。私はオリガミ會ふことを考へて見た。彼女の信するものは——私の信ぜざるものであり、彼女の喜びは——私には不幸だ、そして彼女の勝利は——私の不名譽な最後である。これを反對にも云へるのは勿論だ。私は彼女の許に歸るのは苦し。

三月三日。

我々には眞理を知る必要はない。けれども我々の知つてゐる事は、二つの部分に引裂かれてゐるといふ事だ。その一方は彼等で、他の一方は我々だ。すべての言葉は生きた身體さばならないが、血まはなつて流れ得るのだ。彼等の言葉は血まなつた、そして血の海を現した。何の名を以てか？オリガは四海兄弟さ、平等さ、自由の名を以てとあるさいつた。彼女は夢を見てゐるのだが、夢見てゐるのは私だつて同じだ。けれども、その實、みんな取るにも足らぬ事なんだ。

私は劍を抜いた。抜かざるを得なかつたのだ——それは私がロシアの子だからだ。所が今は？
『私の誠實なる友は私から退き、私の近親者は遠く離れてゐる。而も私は没落に近いて、憂が常に私を待つてゐる。』

三月四日。

私はオリガの許に歸つて來た。彼女の部屋はやはり私に親しみがたいものである。全く裸の生壁、全くいやな肖像……。

「オリガ、それを取外してくれ。」

彼女は私の言ふ通りにした。金縁の肖像をはづして、それから腰を下して、私の手をこつた。

「ジョルジ、手相を見てあげるわねえ、どう？」

私は運勢判断なんて信じないし、またオリガがそれを見たがつてゐるさと思はないので拒絶した。

「止せ……お前はどこにか勤めてる？」

「つこめてるわ」

「どいへ」

オリガは何やら『委員会』といつた。子供を保育する所だ。勿論『プロレタリア』の子供である。

『黨に藉を置いてるんだね？』

「ええ」

私は共産黨に藉をおいたものは絞首してゐたのだ……私はだまつてしまつた。オリガもながい

こゝ黙つてゐた。

「ジョルジ……」

「何だね、オリガ？」

「正道はどこにあるつてあなた思ふ？ 白ではないわねえ？」

「白ではない。」

「縁でもないでせう？」

「うむ」

「その他の古い政黨でもないでせうが」

「さうだ」

「だつたらどこにあるの？」

「僕にはわからん……が、工場、兵營、田舎等の、醇朴なまだ如何なる政黨にも關係しないもの、の許まじにあると思ふね、何れにしてもお前達の許まじにないのは事實だよ。」

オリガは立ちあがつて、私の方へ寄り添つて來た。そして不意に、すばやく、強く我に抱きつ

いた。私は彼女の肉體——高く柔かい胸を感じた。グルーシヤもこんなに抱きついたものだ。
「オリガ、僕は忙しんだ、左様なら。」

三月五日

「ジョルジ、あなたは他の女を愛してるのね？」

「知らないよ、オリガ、そんな事知らないよ……」

「知らない？ ……あなたわたしに愛憎をつかしたのね……わたし、どんなにあなたを待つてたか
知れないわ、ジョルジ、ミころが……ミころが……あなたが『徒黨』になつてゐる事をきいたの……

……どんなにわたしが心配したか、あなたわかる？ ……云ふてね、他の女つて誰？ どんな女？」

「その女はもう居ないよ。」

「え？ では本當？ わたしの推察が的中ちゆうちゆうつたわ、わたしね、ジョルジ、あなたなんか愛しな
いのよ、憎いばかりよ、なんて憎い人だらう……」

オリガは泣く。林の中でグルーシヤが泣いた様に、いくらでも涙を流して泣く。

「いゝえ、あなた浮氣者よ、そして賣國奴よ、國民の敵よ……わたし達の敵、わたしの敵……」

「オリガ……」

「お歸りつていつたぢやないの。」

オリガはこれで二度、私を追ひ出すのだ。そんなことはどうでもかまわないが、私には自分の戀が悼ましい。けれども私には怒もなければ同情もない。街上に出て、彼女を忘れやう。

三月六日。

『イズヴェスチャ』に、『白衛軍の新犯罪、保健省に於ける叛徒の爆發』を題し、次の如き記事を掲げて居る。(革命の番兵として立てる『ウエー、チエー、カー』はアンタントの傭人、メンシエヴィキ、エスエル等の陰謀を發見した。三月五日午後四時、ウエー、チエー、カーの職員等はベオトル・ラリオノフまで保健省の番人を務むる男を逮捕すべく同省内なる彼の住宅を襲ふた。彼は危険なる徒黨で、彼の部屋は椅子や机等で外部より這入れぬやうに固められてあつた。ウエ

ー、チエー、カーの職員等が彼に武器の引渡を要求せるに對して彼の部屋より恐ろしき音響を共に爆發起り、ためにウエー、チエー、カーのタワーリシチ、ウエチス、ピルク及びシチエパンスキの三人は死去し、保健省の建物は多大の損害を蒙つた。徒黨はその何人であるか識別出来ぬほど身を切斷されてゐた。謀叛人は死んだ。サウエート共和國は無事だ。)

『徒黨は爆發のために耳を切斷された』……エゴロフは彼が云つてゐた通りの事をした。彼は絞首もし、銃殺もしまた薪を積んだ上で焼き殺した事さへある男だ。しかしながら彼は『悪魔共』を闘つたではないか。煙草も喫まず、他人の食器も汚さなかつたではないか。彼がこれ等の奉仕は「人が忘れてゐる」この罪から遁れるために十分ではなかつたらうか？ 彼は信仰を有つてゐた。信仰は彼を潔くした。

三月七日。

エゴロフは暗い(無學な)老人であつた。まだよく耕されてないロシア國民の底土は暗い。けれども肥えて豊饒である。エゴロフは深くその中に根となつて這入つてゐた。だが『大きな

地震があつて』田園の生活を動搖させた。そして来たのが新生活だ。……新生活は何を彼に與へたか、『子供が殺され、家が焼かれた』のと……悪魔的な欺瞞であつた。

煙突に風のあたる音が聞える。私はさながら、モスクワに居るのでなく、林の中で楓樹の梢の風に鳴るのをきくやうな気がする。エゴローフが闇の中から出て来て、二本の指で十字を切つて『主よ、恵を垂れ給へ』と云ひさうである。清々しい夏の雨が、歡喜して音をたてゝふる様である。

三月八日。

フェヂヤは隅に腰を下してゐる。彼は煙草を續けざまに吸ふて居る。彼はこの頃メツキリ瘡せた。目の下には黒いかげが見える。彼は『アクリカ』に負けたりしい。

「大佐殿、釣り道具を納はねばなるまいかと思ひます。」

「ウエー、チエー、カー長はどうしたね、フェヂヤ？」

「大佐殿、それが非常に困難であります。私にも注意しはじめました『お前は何時入黨したか？

以前は何處に勤めて居たか？監獄に居たころがあるか？何處の監獄か？……なんてしつこく聞くんです。私はまるで犬見たいにいゝかげんな嘘言をいつてやりましたが、どうもいけません。彼奴等もすつかり狡猾くなりましてなか／＼騙せません……」

「彼奴のアドレスはわかつたか？」

「わかるにはわかりましたが、だつて大佐殿、まるで雛子みたいに捕へるんですから……」

「ぢやお前は出發せろ、フェヂヤ、お前は乃公に用はない。」

彼は煙草の吸ひ殻をペーチカの中に投げ捨てた。

「彼奴は旅行してゐますから、土曜まではどうしても駄目です。土曜に歸つて來るんですが、その土曜までが……」

彼は力を落して手を振つた。彼は恐れて居る。彼の心の中には死んだ鼠が居るんだ。私は彼を遮つた。

「お前は彼奴のアドレスを乃公に渡して、さつささ出發せろ乃公は云つてるんだ。」

三月九日。

フエヂヤは何處へも出發しなかつた。そしてその晩さうく捕まつてしまつた。「イズヴェスチヤ」に『白衛軍』の手先なるカワリヨフが脱走せんとして殺されたを書いてある。即ちフエヂヤはもう居ないのだ。誰も居ない。私一人だ。

三月十日。

土曜まで待たねばならぬ……今日は木曜だ。私はボブルイスクのコムミサルの妾のやうに、今や包圍された獣だ。林の中がなつかしい。ワシリイ・ブラゼンヌイ寺院は打ちしめりクレムリンは悲愁な姿をしてゐる。城壁の許には共產黨革命に際してたをれた闘士の墓がある。彼等には名譽に永久の平和があるが、私には何がある？——広い自由だけだ。林の中で、カッ／＼とくるみの枝を踏みながら、テントを開けてグルーシヤが這入つて来る。

『奴等を殺して頂戴、殺してね……一人も生き残らぬやうに、罰當り共を盡殺しにしてね……』

三月十一日。

フエヂヤの云ふのは本當であつた。「釣道具を納はねばならぬ。私は、夜、ツヨルスカヤ街に出て行つた。まるで箱の中に這入つたやうな自分の生活に息詰る心地なので何を考へることもなく、目的もなく出て行つたのだ。同街を下つて廣場に出た時、一つの貨物自動車に自分を追ひ付いた『タワリシチ、止め！ 手をあげい！』……私はブラウニングをひき出す間があつた。いつも私の手はそれを握つてゐるからだ。私は右の手をあげて、何故とも知らず火蓋を切つた。人は見えなかつた。たゞ黒い影を見ただけだ。最後の弾丸を撃ち終るまでつゞけざまに撃鉄をひいたが、撃つてしまふと、はじめて私は己れにかへつて……四邊を見まわした。けれども何もなく、その上非常に暗かつた。雪に濡れた鋪石道の上に三人の死骸が横はつて、残された貨物自動車のモーターが、ひとりでトツ／＼と音をたてゐた。私は小路に外れた。これぢやどうもウエー、チエー、カー長を殺す譯には行くまい。

三月十二日。

私が教授に暇乞いとまごひしてゐるに、玄關にベルがけたましく鳴つた。教授は慄へあがつた。私はブラウニングをこつて戸を開けに行つた。廊下にはオリガが立つてゐる。

「どうしたの、拳銃なんかもつて？」

「乃公を探してゐるんだ。」

「誰が探してゐるの？」

「お前の友達だよ、共産黨員共だ。」

オリガは毛帽と外套を着けたまゝ殆んど椅子の上に倒れるやうに腰を下した。

「ジョルジ……あなた出發するの？え？」

「さうだ。」

「ジョルジ、わたしを連れてつてね、ジョルジ……」

「何處へ？」

「何處へでもいゝわ。」

「わたしを連れてつてね、何處へでもいゝわ……」こはグルーシャも私に言つた……この頭髪を

短かく刈りこんで毛帽をかぶつた變な女は、なぜ私に慣れくしい口をきり、ジョルジなんて呼ぶだらう？

「オリガ、駄目だよ。」

「ジョルジ、わたしはあなたが何をしようとも何も云はないの、それでね、こればかりはいやだ。云はないでね……可愛想ぢやないの……わたしはあなたを愛してゐるのよ。ジョルジ、わたしはいつだつて愛してゐたのよ……」

「駄目だよ」

「わたしが共産黨員だからなの？ あなた達に反對の立場にあつたからなの？」

私は答へない。

「ね、言つて頂戴……どうなの？」

彼女は泣かない。その眼は乾いてゐる。そしてグルーシャが私の返事をまつた時のやうに、それこは違ふ返事を待つてゐる。

「お前を連れて行かない理由は、僕がお前を愛してないからだ」

私はさうは言つたが、自分で自分を信じなかつた。オリガは頭垂れた。教授は臺所でコップの音をさせてゐた。壁には時計がククミ鳴つてゐた。窓の外に雪がゆるやかに舞つてゐたのを私は記憶してゐる。

三月十三日。

私は汽車の中に居る。車内は半外套とマホルカ(下等の煙草)の臭氣でむつみする。ずつと離れた隅の暗い所に一人の若い男がバラライカを弾いて歌をうたつてゐる。

あゝ私のコムーナ、コムーナ、

あゝお前のげすな面構え……

私は何事を成就したか？ 後——には新しい幕。前には……前には何が私を待つて居るか？ 前途は遼遠多難で、その終りは見えないが、また之を豫知する事も出来ない。彼等は明日倒れるかも知れないが、誰が彼等に代るのか？ フェヂヤ、エゴーロフや、ウレデか？ 或は白い手をもつたカシヤン聖者か？ だが、破壊にあらずして建設をせねばならぬではないか……オリガ……

私は彼女を愛しないといつた。さうだ、もう世の中には私のためには誰も居なくなつた。『ロシア——オリガ、オリガ——ロシア』は嘘言だ。ではグルーシヤは！……もうグルーシヤも居なければ、オリガの幻想もない。

コムーナの財布は穴だらけ

コムーナの半分は泥棒だらけ

機關車は鋭い聲で汽笛を鳴らし、車は轟々と鳴る。列車の内にはバラライカが鳴つてゐる。汽車はまつしぐらに走る。どこへ走るか？

三月十四日。

汽車は走る。私は裸になつた白樺の下に、帽子をかぶらぬ男が首に繩をかけてぶら下つてゐるのを見る。『十字はどちらを向いて切るか？ 日の出の方を向いて切れ』……私にはまた、火が赤く燃えて、肩が白く露出してゐるのも見える……『顎髯に火を點ける』……私にはまた、燃えあがつてる村の或る家に、ふりあげた斧のギラリミ太陽に反射したのも見える……『殺すぞ！』……

「汽車は走る。『タワーリシチ、恐がるな！ 聖なるロシアに弾丸を發射たう！』……」
 彈丸は盛に發射された。傷づいたロシアは跳き苦しんだ。彼等ばかりでなく、我々も發射した。手に銃をもつたものは誰でも發射したのだ。ロシアの味方は誰か？ 敵は誰か？ 我々か？ ……
 ……彼等か？ ……我々も彼等もか？ ……
 その期限を知る必要はない。ロシアは復起する——國民の奥深い内から、我々の血によつて復起する。我々は『絨毛』だつてかまやしない、暴風が我々を『持上げ』たつてかまやしない。我々は盲目で、互に憎み合つて居るが、一つの法則には従順である。然り、我々は我々の罪を測るまい、又小さな我々の犠牲も數へまい……『第三の封印を解きたるに、第三の活物の『來れ』ミ言ふを聞けり。我れ視しに一匹の黒馬を見たり、之に乗るもの手に權衡を持てり。』

黒馬を見たり (畢)

(黒馬を見たり)

大正十三年七月廿八日印刷
 大正十三年七月卅一日發行

(定價一圓)

翻譯者 黒田乙吉

發行者 東京市牛込區天神町六番地 森孫一

發行所 東京市牛込區天神町六番地 隨筆社

振替東京六六〇七九
電話牛込三四番

印刷者 安藤金重
 東京市京東區吹町百九十八番地
 印刷所 安藤金重
 東京市京東區吹町百九十八番地

蒼ざめたる馬

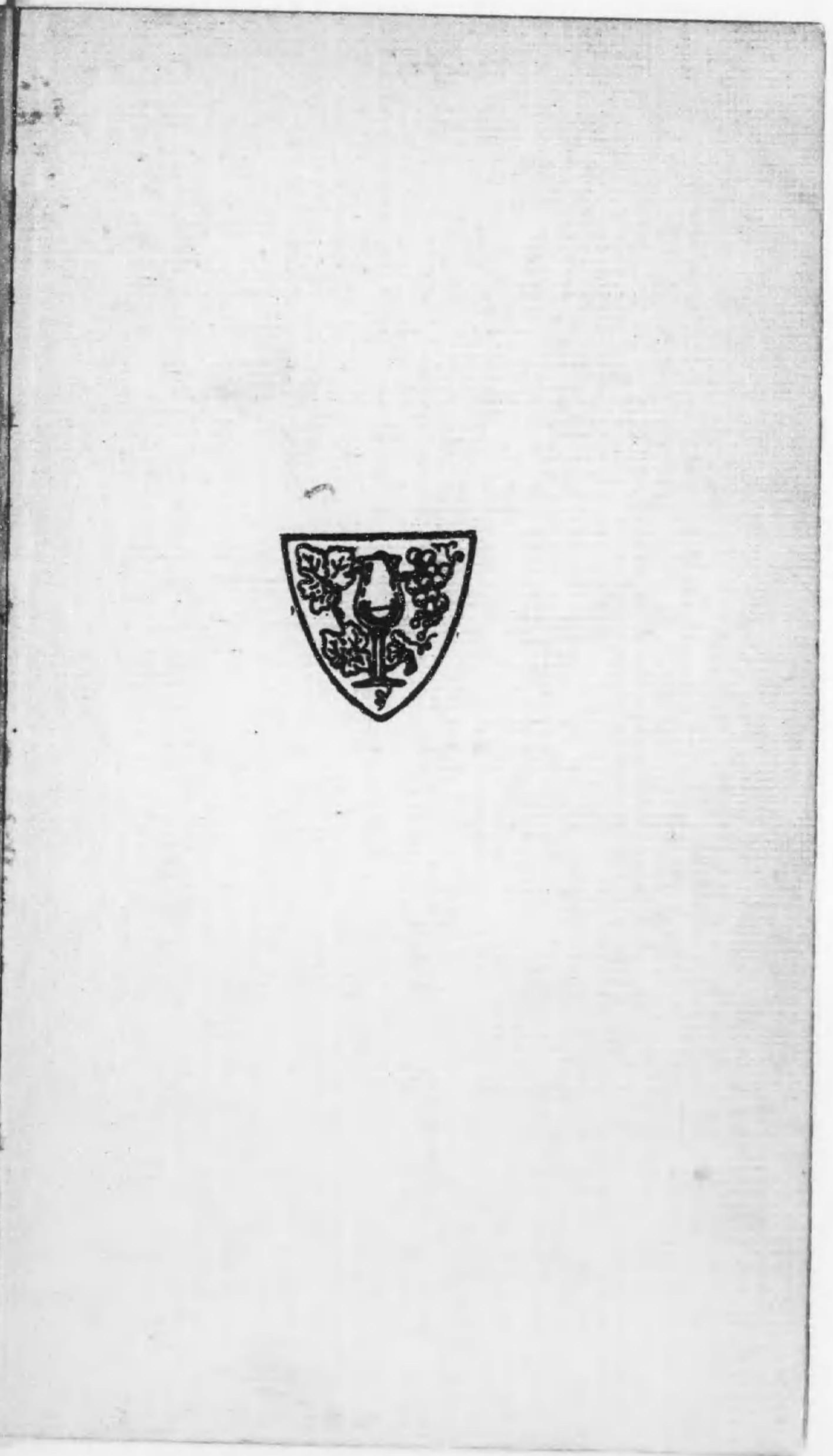
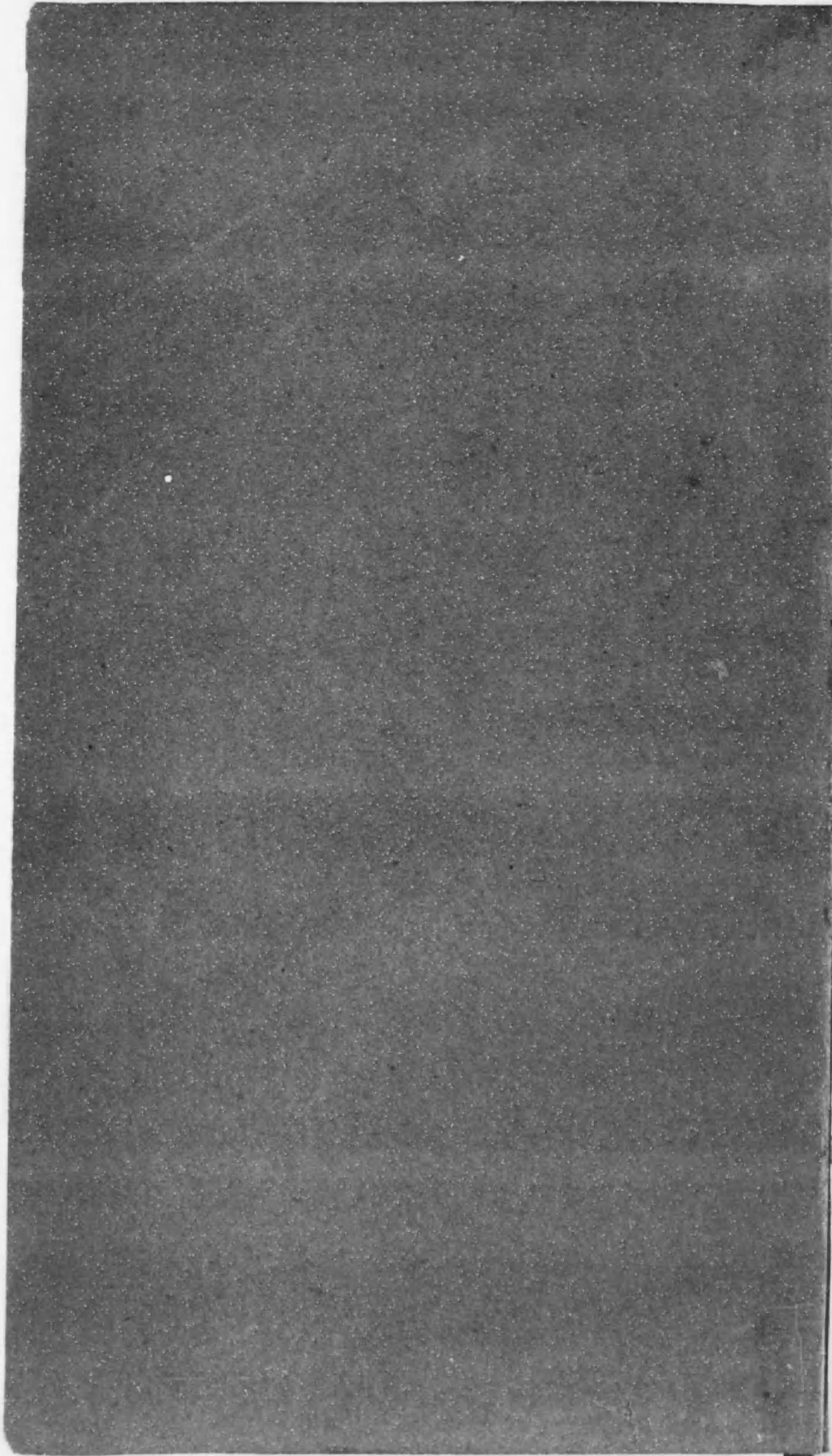
ロープシン作
青野季吉譯

——「黒馬を見たり」の姉妹篇——

この小説が出た時、文豪メレヂコフスキーは「これ程近代ロシヤの魂を
掴んで描き出した作はない」と激賞したといふ。以てその眞價を知るこ
とが出来よう。革命家の行動に戀愛の三角關係をからませた華々しくも
また沈痛なる作品である。近時の翻譯文學中最も優れたるものとして喧
傳されることは故なきにあらずである。

定價 一圓廿錢
郵税 十二錢

東京 隨筆社出版部



529
68

終

